

---

# 闇の校舎

阿万

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

闇の校舎

### 【Nコード】

N0505X

### 【作者名】

阿万

### 【あらすじ】

その廃校には何か、邪悪な何かがあった……。好奇心で霊が出るといふ廃校に集まる若者たち。しかし、彼らは知らなかった。そこが地獄の入り口だということを。

1 (前書き)

ホラーです

閉ざされた正門。寂れた校庭、その奥にあるもの哀しい雰囲気を帯びた校舎。呪いを受けたような、廃れた様子。

廃れているのは当然だ。ここはすでに人の営みのない廃屋だから。「やってきたな」

正門の前に集まる七人のうちの一人、茶髪の髪をした日に焼けた男、前田智史が言葉を発した。

「マジで何か出そうじゃねえか」白いキャップ帽を被った男、堀内広が口笛を吹いた。その顔は不安と、そして期待に溢れている。

「こんなところ本気でいくの？」浅海唯が不安な顔をしてみせる。

「当然。呪われた校舎！今回は前と違って本当に出るかもしれないがいぜ」智史は喜びにはちきれんばかりの笑みを浮かべて皆の不安をかき消す。

「これはひよっとするとひよっとするかもしれない」新津夏雄がぼそりという。

「夏雄、あんたこの間のトンネル探索のときもそうだったの、忘れた？」須川満希が呆れた声を出す。

「今度はいい写真が取れるって。久々のヒットが期待できるよ」と夏雄は最新式のデジタルカメラを振って見せた。

「よし、みんな覚悟はいいな、行こう！」智史が塀の壁に手をかけて上り、正門の向こう側に行つて他の六人を振り返った。「早くこいよ」

六人は智志に習つて壁を上り、正門の向こう側へ着地した。小さい唯と運動神経のない怜香は男達で助ける。

智史を中心にして集まる仲間。彼らは智志以外全員二十歳で、智志だけが二つ上だった。大学に在学している者、就職している者など。ばらばらの彼らだが、彼らには同年代以外にある共通点があつ

た。

全員、過去に霊を見た過去があるということ。最初は智志だった。彼が自分のような霊を見たことのある仲間を集った。同じ学校の友人で、隣のクラスにいる霊を見た過去を持つ夏雄を誘い、夏雄は中学の友人で霊を見たという広を誘い、と行った感じで高校は違えど同じ体験のある仲間はたまに智史を中心にしてこういった心霊ツアーを開く。ほとんどが廃屋だ。彼らはそこで心霊現象を体験することもある。ないときもあるし、ないときがほとんどだ。体験することとはできなかったときも、お化け屋敷に入るようなスリルは味わえた。彼らはそれまでの体験を怖がりつつも楽しんでた。そして智史はネットでこの学校のことを知る。同じ県で、そう遠くない場所にあった。これだ！早速仲間に誘いかけ、いつもとほぼ同じメンツが揃ったわけだった。彼らは好奇心旺盛な、未知との遭遇を期待する若者だった。

「殺された少女の霊に会えればいいけどね」校庭をゆっくりと歩きながら唯がいった。唯は背が低く、本人はそれをコンプレックスに感じていた。大学の友人の間でも唯は背の低い女学生として認知されている。こうして他のみなと並んでいても、唯だけ随分と低く見えた。顔も童顔。髪も短め。この中ではマスコットののような存在が唯だった。

「本当にそう思ってる？」木村悠子が言う。栗色の髪を長くしている、どこか高飛車そうなそこその美人だ。

「本格的な霊なんて怖いよ。あたし……今でも夢に見るもの」飯田怜香。整った美しい顔立ちだが、どことなく気弱で、おっとりした性格が彼女の美しさを損ねている。暗い女だと思われることもあるが、この中では上手くやっていた。それは、唯や満希が上手くフォローするからだろう。

「大丈夫。いざとなったら男たちを置いて逃げればいいから」満希がぼそりと怜香に耳打ちした。

天気は曇り。八月だというのにどこか肌寒い。校庭にあるサッカ

「ゴールは倒れていた。自転車置き場には当然ほとんど自転車など置いていなく、駐車場にも車は一台も止まっていない。そしてその先に校舎が陰鬱な雰囲気醸し出して構えていた。

「あたし入りたくない」怜香が足を止める。

「大丈夫だよ。俺がついているさ」智史が言う。

「だけど……」

「もう、怜香。唯だつてちょっと怖いけど、今までだつて何にもなかったんだから、いだけいってみようよ」

「そうだけ怜香。こんなに小さな唯だつていくつていつてるんだぞ」と夏雄が唯の頭を優しく撫でた。

「小さいっていうな」唯が夏雄の手を叩く。わりと手加減のない叩き方で、夏雄は痛かったのかとっさに手を引つ込めた。

「怜香、せつかくここまで来たんだし、行くだけいこうぜ」広が言った。

「わかった」怜香は仕方なさそうにそう答えた。

正面玄関の前に来る。透明な扉の奥に下駄箱が見える。智史が扉を開けようとした。当然のように扉は開かなかつた。

「当たり前だよな」そう呟いたのは河西昌樹だつた。昌樹はこの男達の中では寡黙な性格だつた。昌樹は霊を見たことがないようだが、今回のツアーに参加している。彼は夏雄や唯と同じ大学に在籍していて、夏雄たちがこの学校に行くということをごどこから聞きつけて同行した。

「勿論、当然だ。だけどね、こんな楽しいスポットに侵入しようとしたのは俺達だけじゃない。先輩達は沢山いたはずだよ」智史は玄関から離れてその隣の教室の窓に向かつた。その窓は叩き割られていて、少し危険だが、なんとか入れそうになっていた。

「いつも思うけど、先人たちは偉大だな」夏雄が呟いた。

「中に入ろう。気をつけて。怪我するなよ」智史が真っ先に窓の中に侵入し、続けて次々と入っていく。怜香が最後に残つたが、唯の必死の眼差しでなんとか中に入った。

八人は教室を見回す。薄暗いのは仕方がない。電気をつけようにも電気はつかない。しかしライトを照らすほどの暗さではなかった。八人が見つけた情報は、ここは一年C組で、机や椅子が乱雑に置かれているということ。黒板には赤いチョークで西岡参上！ と大きく書かれていて、その下に幽霊上等！ と書かれてある。割れた窓ガラスの破片が床に散乱している。

「いいね。いい雰囲気じゃん」広が高揚した声で言う。

夏雄がカメラを取り出し適当に教室内を撮る。それから一同は特に見るべきものはないなと思い、廊下に出た。

廊下は意外なほど綺麗だった。壁や天井、窓の様子。まるで廃校とは思えないほどで、今にも生徒たちのしゃべり声が聞こえてきそうな様子だった。実際は物静かなものだが。

一同は智史を見た。まず、どこへいくか。決定権は智史にある。いや、みな智史に決定させたがっている。

「隣の教室に行ってみよう」

一年C組の隣の一年D組。内容は一年C組と似たようなものだ。机や椅子がやはり乱雑に置かれ、黒板には汚い英語が並んでいる。

夏雄は教室内を適当に撮っていく。夏雄は廃屋巡りのときは必ずカメラを持参する。霊がいようといなかろうと、廃屋ツアーそのものの雰囲気カメラに納めるのもこのツアーの醍醐味の一つだった。霊が写る確率はほとんどなかったが。

カメラを構える。そして……黒板を見つめる唯の横顔を撮った。不安そうに黒板を見ている小さな少女のような成人した女。中々いい感じだ。可愛く撮れた。だが唯だけだと勘ぐられると思い、満希と怜香を撮り、ついでに他の連中の様子も撮影しておいた。

「何でこんなに乱雑に置かれてるんだらうな」机を見て広が言う。

「前に入った人達が暴れたんじゃないやね。霊出て来いやあって感じで」

満希が言う。

「そうだな」智史が適当に応じた。「ここには何もなさそうだ。次いこう」

教室を出る。すぐ近くに水道があり、その隣にトイレがあった。

「トイレ、入ってみよう。男女別で行く必要はない」

「そりゃそうだ」夏雄が言った。

男子トイレ、女子トイレ分かれている。八人は男子トイレに入った。男子トイレは長い間使われていないわりには綺麗に見えた。壁のタイルがはがれているし、小便器もとどころひび割れている。しかし使う分には全く問題なさそうだ。当然水は出ないが。

大便器の個室の扉を開く。そこに何かが見れるのを期待するが、何もいない。壁には乱雑に様々なことが書かれてある。由理子は文雄の嫁。篤志最高！涼子のおそこにぶちこみたい。おしゃぶり、一回五千円。香奈美は黒アナル、乳首も真っ黒……他の個室を見ても、大した違いはない。

「出ようか黒アナル」カメラに納め終わると夏雄は広にそういい、頭を叩かれた。

女子トイレを見ても特に何もなかった。

廊下に出て、彼らは智志を囲むように輪になる。

「さて、どうしようかな」智史が考察中だというように目を閉じた。「やっぱり霊なんているわけないよね」悠子が言う。「この霊の噂だつて場所が場所だからね。作り話が膨らんだんだよ」

「だけど変な事件は起きたじゃないか」夏雄が反論する。「十数年前、まず、この教師が殺人事件を起こした。放課後、自分の教え子をトイレに連れ込んで性的暴行を加え、殺した」

「本当の事件なの？」悠子が疑わしい顔をする。

「当然だろ。ニュースにもなったし、新聞にも載った。教師は今も獄中だ」

「糞野郎だ」広が不愉快な顔をする。

「他にも何かあるの？ その殺された少女の霊が出るってこと？」



「いや、それから二人行方不明になった。それからは平和だったらしい。だけど、数年前に再び行方不明事件が起きる。そしてその後でこの学校には奇怪な事件が起きてる。生徒たちが突然発狂して病院送りになる。何人かの生徒がそうだった。狂った生徒は死んでしまった。生き残って正常に戻った生徒がいうには、何かおかしいものを見て、それを見たために気が狂ったそうだ」

「何を見たの？」

「わからない。何か、恐ろしいものを見たってことだけ」

「それから失踪事件が起きたんでしょ」満希が続ける。「生徒が一人消えた。それから続けて一人、一人と。全部で何人消えたんだっけ？」

「十一人だ」昌樹が答える。

「そんなに！」悠子が目を丸くする。

「だから廃校になったんだろ」夏雄は悠子の無知に呆れた様子ながらも続ける。「この学校には何か得体の知れないものを取り付いているって噂になってさ。中年数学教師が生徒を殺し、自身も原因不明の死を遂げたつてのが決定的になって、学校は閉鎖。噂と実際の事件のおかげで迂闊には誰も近寄らない場所になった。こんなのは事前に知ってるだろ。俺でも予備知識くらい持つてるよ」

「でもさ、それってまじやばくない？ この学校に何かいるってことでしょ？」悠子は脅えた顔になる。

「だから、みんなでそれを探してるんだろが」広は背中から隠し持っていたバットを取り出した。黒い、金属バットだ。八人の中でも一際背が高く、がっしりとした身体つきの広は喧嘩が強い。力で解決できる事柄なら広は頼りになる。

「何があってもこれで一撃さ」

「物理的な攻撃なんて霊には効かないよ」唯が言った。「ヒロはいつもバット持つてるけど、無意味だと思う。そっぴやヒロってあんまり霊と遭遇しないねえ」

「だって俺靈感一番薄いらしいし」そういう広の顔は少し残念そう

だ。

「霊なんてここにいるかどうかわからないじゃん」満希が言う。「変態教師に殺された少女の霊が他の生徒を狂わせたり、神隠しにするって噂なんて当てにならないよ。というか、こんな変なところ本当にくだらない。さっさと出てカラオケでもいこうよ」

満希は最初からこのメンバーに参加しているが本人は別に廃墟ツアーが好きではなく、彼女はこんなことは陰気なオタクたちがやることだと思っている。しかしそれでも彼女がツアーに参加してしまうのは、智史の存在と、過去の霊体験が彼女に大きな影響を及ぼしているからだった。

「カラオケいきたいね」唯は廃校巡回に飽きてきたようだ。

「ちよつと待てよ。まだ九時半だぜ。もう少し撮らせろよ。ここ出でずつとカラオケってわけにはいかないだろ」夏雄が言う。大体、廃墟巡りが終わるとカラオケや食事に行き、それで終了となることが多かった。

「そうだぜ。まだまだ見て回るんだからな」智史が言う。

「次はどこにいくんだよりリーダー」と夏雄。

「そうだな、順々に行こう。一年BかAの教室に行くんだ」

「行って何になるんだ？ 時間の無駄だろ。やっぱり何もいないんだよ」言ったのは昌樹だ。

「リーダーに逆らうんじゃねえよ」広が昌樹を半ば脅すような口調で言い、昌樹は何かいおうとして黙った。

「まあまあ。何かがいるかいないかなんていつてみないとわからないさ」

智史に従い、一年A組へ。窓ガラスが割られ、机と椅子がばらばらになっている。黒板にはやけに上手い少女の漫画絵。夏雄はなんとなく二、三カメラを切る。違和感があったように彼には見えなかった。が、画像を見ても特に何も写っていない。夏雄は今まで撮ったものを確認してみたが、霊の影など一つも写っていない。ため息をつく。

それから他の教室を覗いてみる。大体、一階にある部屋は全て入ってみた。しかし期待したものは何もなかった。

廊下に出て、一同は次にどこへ行くか決めかねていた。

「二階に行ってみる？」唯が退屈そうな声を出す。いつの間にか外の天気は晴れていて、日も昇ってきて窓から光が差し込みはじめた。雰囲気に不気味さがなくなってきた。

「無駄っぽいけどね」満希が言う。

「別棟もあるし、くまなく探りたいな」智史だけがまだまだ探索に対する熱意を失っていないかった。いや、それどころかますます増していったようにも見えた。

「やっぱりそうだ。所詮、何もないんだろ？」霊に懐疑的な昌樹が疑う。「あんたらが過去に霊体験があるってのも本当は嘘なんだろ」

夏雄と広が昌樹を睨みつける。

「わからないけど……だけど、なんか変だ」智史はいやに真剣で、どこか興奮していた。

智志は動かない。

「智志？」

唯が声をかけるが智志は動かない。

智志は目を閉じ、じっとしていた。

「何だつてんだ？」昌樹が嘲るような顔をする。

「なあ、夏雄。俺、腹減ってきた」広が自分の腹をささる。

「飯はあるけどまだ早くないか……まあ食べよ」夏雄はシヨルダーポーチからコンビニで買ってきたシーチキンのおにぎりを取り出し広に渡した。

「サンキュ」広は美味そうにおにぎりを食べ始めた。「これで昼までもつ」

おにぎりをおつという間に平らげた広が神妙な顔つきになる。

「どうしたんだ？ 喉でもつまつたか？ ドリンクならあるけど」

夏雄が笑って言う。

「いや、なんか変だよなと思って」

「何がよ？」

「うん、違和感っていうか。なあ、俺達って」

「智志、どうしたの？」満希が智志に尋ねる。

「うん……。やっぱり感じるな。何か、いるな」

「で、どうするんだ？」広が聞く。先ほどの会話は中断されたようだ。

「ちょっとまってくれよ」

「リーダーの好きにしてくれ」広は言った。

「二階に行ってみよう」

智史が動くと他の者もそれに続く。

しかし、一人だけ動かない者がいた。

唯が気づいた。

怜香がついてきていない。振り返ると、怜香が下を向いたまま立ち尽くしていた。長い髪が彼女の顔を覆っている。

智史が笑って怜香に近づいた。「なんだよ、霊の真似のつもりか？」

怜香の唇が歪んだ。

「智史！」夏雄は叫んだが、何故叫んだのか自分でもわからなかった。ただ、いやな予感がした。

智史が夏雄たちのほうに振り返ろうとすると、怜香が何かをした。

智志が驚愕の顔を浮かべた。

「え」夏雄がぼそりと口にした。

満希と唯がほぼ同時に悲鳴を上げた。

智史が膝をつき、床に倒れた。

倒れた智史の背中に血が流れている。

怜香が顔を上げた。

一瞬の静寂。彼らの中でどういうことが起きたのか、理解できない者もいたし、理解してもそれがどういう意味なのかわからない者もいた。少し経つと全員が、あることを理解した。

智志は刺された。怜香の手によって。

髪の間から見える目が異様に見開かれた怜香はいつもとまるで様子が違っていた。右手には血の滴る包丁を持っている。彼女は血を滴らせるナイフを構えながらゆっくりと六人のほうに歩き出した。妙な歩き方だ。まるで機械仕掛けのようにぎこちない歩き方。無理やり歩かされるような。しかしその妙な動きは彼らに恐怖感を与え、るには十分すぎるほどだった。

脱兎の如く、満希が逃げ出した。続けて唯が走る。

広はバットを構えて夏雄たちの前に立った。

「どうすんだよ！ あれは怜香だぞ」夏雄が叫んだ。状況は全く理

解できていないだろうが、広が怜香を金属のバットで殴るかもしれないということはわかったようだ。

「怜香じゃない」広が答える。

「じゃあ何なんだよ！」夏雄は叫び、倒れた智史を見る。智史は動かない。背中血が止まらずに流れていく。

「あいつ、早く止血しないとまずい。生きてるんだろっな」昌樹が言った。

「生きてるに決まってるだろ！」夏雄が怒りの声を上げるが、生きてるのかどうか、夏雄にも確信はないだろう。智志は倒れたまま動かない。

夏雄はこの状況の不可解さに戸惑っていた。怜香はすでに広の目の前にいて、二人は互いに対峙している。広と怜香が戦う……狂ってる。こんなに馬鹿馬鹿しい状況はありえない。バットを持った男が、普段は怖がりなだけの臆病女にそれをつきつけている。しかしその女は包丁を持っていて、それは血に染まっているのだ。

怜香の右手が勢いよく上がった。不自然な動きだった。そのためか、広には十分に対処できた。彼はバットを振るって怜香の包丁をなぎ払った。金属音がし、包丁が怜香の背後に落ちる。

そのあと、広は怜香の胸元にバットを突きつけた。それ以上近づけば何をするかわからないぞという、彼なりの脅しだった。しかし怜香の目はそれに動じることはない。彼女の目はまるで怒りに燃えているかのようだった。

夏雄はどうすればいいのかわからなかった。広はどうするのだろうか？ 怜香がさらに向かってくるのなら、今度は彼女の体を打つだろうか。しかし相手は怜香なのだ。だがその怜香は……。

玄関扉から逃げることはできるのだろうか。夏雄は考えた。別には外に逃げられないパターンが多いのだ。

そうだと。夏雄ははっとする。これは心霊現象だ。怜香は乗り

移られた。

走り、玄関扉に近付いて扉を開けようとする。駄目だ。やはり開かない。鍵がかかっているというのだろうか。だが内側から開かないというのはどういうわけだろう。見ると鍵穴がある。馬鹿にしている。まるでこちらが閉じ込められたかのように……。夏雄は舌打ちする。そして今度は、入ってきた教室のほうへ向かう。

予想はした。予想はしていたが、その不可解さに愕然とする。窓はどれも割れていなかった。

割ろうとしても無駄だろう。経験上、それは明白だ。

すぐに広たちの元に戻る。

怜香と広はお互いの様子を伺っているようだ。互いに動かない。怜香はにやりとした。彼女はスカートのポケットからもう一つ、包丁を取り出した。その包丁と彼女の微笑みに三人は凍りついた。咄嗟の反応だった。広は素早く後方に下がったために怜香が横に振るった一振りには、広のポロシャツを掠めただけだった。広は彼女の勢いのいい包丁使いに背筋を凍らせた。全く躊躇のない速さだった。まともに当たっていれば、深い傷を負っていたかもしれない。

さらに、明らかに喉を狙った一突き。これも広は回避した。今度は素早く後方に飛び、尻餅をついた。バットが転がる。尻の痛みは気にならなかった。転がったバットを再び持つ。立ち上がり、再び怜香の前に立つ。

「お前ら逃げてる。俺は怜香を救って智史も救う」広は言った。

「ヒロ、どうすんだよ？」夏雄が震える声を出す。

「安心しろ。俺も怜香も大丈夫だ」

「いこう。俺達邪魔だ」昌樹が言った。

「お前も一緒に逃げよう、広！」夏雄は叫ぶ。

「駄目だ。お前らはどっかいてる、邪魔だ！」

「早くいこう。邪魔になるぞ」

部外者のお前が口出すな、と夏雄は思ったが、広の邪魔になるのは嫌だった。彼は仕方なく、真っ先に逃げ出した女二人の後を追う

ことにした。二人は二階に向かったはずだ。夏雄と昌樹は走り、階段を駆け上がっていった。



二人は二階に駆け上がった。二階の廊下は静かなものだった。

「あの二人はどこにいったんだろうな？」昌樹が聞く。

「知らねえよ。それよりも智史だ。向こうの廊下からまた一階に戻って、智史を救おう。さっきの怜香の脇を通り過ぎるのは無理そうだったからな」

「なるほど、そうだな。早く助けないと危険だと思う。急ごう」

夏雄は走った。全速力だ。智史。智史が死ぬなんてありえない。

彼が生きていないと、この仲間が崩壊してしまう。夏雄はすぐに立ち止まった。突然悲鳴が耳に響いた。

満希、唯、悠子が、二年B組の教室から出てきた。三人は夏雄たちを見つけると素早く二人の後ろにまわった。

「なんだ？」

「血だらけの女が！」満希が叫ぶ。

血だらけの女？ 夏雄は二年B組の教室の入り口を見る。そこからゆっくりとセーラー服を着た少女が現れた。少女の全身は血にまみれていて、どこぞのスプラッター映画のようだった。血は、割れた頭部から流れ出ているようだ。短いショートヘアを茶に染めた少女の髪の毛はところどころ赤く染まっていて、その血は休むことなく流れているが、床が血だらけになることはなかった。足元までくると、血は消えてしまっていた。

少女の右手にはカッターナイフが握られている。

夏雄は後退した。それにあわせて背後に隠れている満希と唯も後退する。血まみれの少女はぎょろりとした生気のない目で夏雄を凝視しながらゆっくりと近づいてくる。一步、一步、確実に。

夏雄は困惑した。これが霊だろうか。まるで実体があるかのよう<sup>に</sup>生々しい。霊を見るのは別に初めてじゃない。何度も目撃している。しかし、臃な姿を見るくらいで、こんなにもはっきりとした霊

を見るのは初めてだ。目の前にいる存在は確かに、生きている人間のような。傷跡を見る限りでは、すでにこの世のものではないのは理解できるのだが。

握られたカッターナイフ。接触は断じて避けるべきだ。夏雄はひたすら後退した。

女の悲鳴。夏雄が背後を振り返ると、またもや霊だ。やはり、血まみれの長い黒髪の女生徒の霊。高校生のわりに大きく育った胸元から腹にかけて裂け傷があり、そこからたえず血が流れている。右手に握っているのは彫刻刀だろうか。

血、血、血。夏雄は具合が悪くなってきた。

「どうするの、どうするの！」唯が泣き叫ぶ。

昌樹が行動した。彼は夏雄に近づきつつある少女霊を素早く両手で突き飛ばした。少女霊は二年C組の扉にぶつかった。

「こつちから逃げるぞ！」昌樹が叫び、五人は急いで廊下を走って逃げた。走って階段までたどり着けば、一階にいき、智史を救える。左側に別棟にいく廊下があるが、それは無視する。もう少しだ。しかし唯が転んだ。唯が転んだことに気づいた夏雄はすぐに引き返して唯を起こした。女子高校生の霊たちはぼんやりとこちらを見ている。追いかけてくる気がないので、諦めたのか。とにかく助かったと夏雄は思った。あとは階段を下りれば……。

しかし階段に続く折れ口から現れたのは怜香だった。怜香は黒髪を揺らせながら歩き、その顔は髪に覆われてほとんど見えなかった。その口元が醜く歪み、笑っているのは、なんとなくわかった。怜香の白く、華奢な両手には鈍く光るナイフが握られている。

怜香は狂ったように、笑い、五人を心底脅えさせた。

「広はどうしたんだよ？」夏雄は叫ぶ。

「そいつをどうにかしてよ！」悠子が怜香を指差して叫ぶ。

「でもあれは怜香だよ？」唯が言う。その目は涙で潤んでいた。

背後には幽霊たち。前には狂人。どうする夏雄？ 夏雄は必死に状況を打破する術を考える。そう、唯のいうとおりだ。あれは怜香

だ。智史を刺したが、それでもあれは怜香なのだ。広はそれをわかっていた。だから、だからやられたのか？

「くそつ、なんなんだよ！」夏雄はわけがわからずに叫ぶ。そう叫んだあと、喚いても無駄だということを悟った。これは、現実だ。何かしなくてはならない。全員がここから脱出する方法を考えなくては。

まずはこの状況を打破しなくては。

夏雄は二年A組の教室に素早く入り、椅子を二つ抱えた。廊下に出ると彼はそのうち一つを怜香に投げつけた。怜香の体に椅子が直撃するが、怜香は怯まなかった。まるで全く痛みを感じていないかのように。もう一つの椅子を投げてもおそらく無駄だろう。頭部を狙うという手は無しだ。ダメージがあるのかは不明だが、怜香の体にあまり衝撃を与えたくない。

耐えられなくなったのか、満希が階段を駆けあがっていった。それにつられたのか悠子も階段を駆けあがっていった。

智史の下に行くには、この階段を下りるのが一番だ。だが怜香がそれを許さない。だが怜香がここにいるのなら、また、戻ってきた階段を下りるのもいいが、怜香はすぐに降りて待ち伏せできるし、背後にはセーラー姿の霊たちがいる。

三階にいこうかと思っただが、怜香は上下どちらの道も阻んできた。上階にいく道も絶たれた。ならば……。

夏雄は唯の手を掴む。そして走った。昌樹は勝手についてくるだろう。別にどうでもいい。廊下を元来た方向に走り、右側にある別棟へいく渡り廊下の扉を開けた。ここは別棟へ渡れる唯一の場所だ。「こつちにきてどうするんだよ！」昌樹が走りながら怒鳴る。

「しらねえよ！」夏雄は怒鳴り返す。夏雄は思う。何か武器があれば刃物を持った女なんかには恐れはしない。だが金属バットを持った広は、おそらくやられてしまったのだ。

外には出られない。窓を修復してしまうような状況。少しだけ冷静になると、背後にいる存在の巨大さが伺えた。

試しに夏雄は窓を開けてみようとした。しかし、窓の鍵はても動かない。やはり予想通り。力任せに勢いよく殴って見る。実際に割れたら自分も怪我をして危険なやり方だが、今はそれでも構わないと思った。

やはり駄目だ。わかりきっていたことだ。逃す気なんて向こうはないのだ。

この廃校は自分たちをここから出す気などない。

「開かないの？」唯が聞く。

「ああ」

以前にもあった。扉が開かない、窓が開かない。ものをぶつけても、何をしても壊れない。それは、つまるところそれだけのことができるということ。だが、今はそんなことより、智志達のことだ。

渡り廊下の最後に何もできませぬように、と夏雄は祈った。祈りが通じたのか幸い何もできませぬように、と夏雄は祈った。祈

こちらの棟は不気味に暗かった。三人は左右に廊下を見回した。化学実験室の表示のある教室が彼らのすぐ隣にある。その隣に視聴覚室。一番奥に図書室。その反対の奥に美術室。

「どうする？」昌樹が聞く。

「わかんねえよ。とにかく、安全そうな場所に隠れるんだ」

「安全な場所なんてあるの？」と唯。

夏雄は困った。だが自分がここまで導いたのだ。何か良さそうな場所を探さなくては。適当に廊下を歩き、彼は放送室の扉を開けた。放送室はカーテンが閉まっていて薄暗かった。不気味なので夏雄は中に入るとすぐにカーテンを開けた。少しだけ明るくなる。唯たちも入れるとそつと扉を閉めた。

「ひとまず、ここでじっとしていようってことか？」昌樹がため息をつく。

「何かいい案があるならいえよ」

「ギスギスしないですよ。こんな状況なのに。互いに協力しあわなきゃ。でしょ？」

「だったら真つ先に逃げるなよ」夏雄と昌樹は同じ台詞を同時に言った。

「ごめん」唯は本当に反省したように顔を赤らめた。

「いや……し、仕方ないだろ、あんなことがあつたら」慌てて夏雄は言った。

沈黙が続く。静かだった。あまりに静かなのがかえって彼らの不安を増大させた。

「怜香、どうしちゃったのかな」外に漏れないような小声で唯が呟く。

「憑りつかれた、としか思えないな」夏雄が答える。

「霊なんて信じたくなかつたけど、そうとしか思えない」昌樹がいう。

「だって見ただろ？ あの子の霊二人」夏雄が言う。

「霊ってほどぼんやりしてなかつた。ゾンビみたいだった」昌樹が言う。

「校内だけの霊なら、あれは自縛霊に該当するな」夏雄がいう。

あの頭部のすげえ傷見たか？ あのぶよぶよの灰色、あれは脳み…

…

いいかけて彼は唯に口を封じられた。唯の顔は青ざめている。目に涙を浮かべている。夏雄はそつと唯の腕を掴み、手を離れた。

「悪かつたよ」小声で謝る。

唯は顔を床に向ける。

「あんなの……あんなのありえない」唯がかすれ声で呟いた。

夏雄は壁に頭をうずめた。壁はひんやりとして気持ちが悪かった。ここにいて安全ならいいけどな、と彼は思った。

「少しまとう。けどいつまでもいられない。智史のところについてやらないと。だろ？」昌樹がいう。

夏雄はぞくつとした。そうだ、智史を救うのが先決だった。だが今、智史からどんどん離れてしまっている。あいつはまだ無事でいるだろうか。広はどうなった？

彼は頭を抑えた。わけがわからない。  
廊下から足音が聴こえた。

満希が全力疾走し、逃げた先は薄暗い教室だった。三年B組の教室の、適当な机の下に彼女は身を隠した。誰かが走ってきたが、彼女はそこから動かなかった。

「満希？」女の声と呼んだが彼女は応じなかった。仲間の誰かなのだろうか、彼女はそれに答えなかった。なんとなく、嫌だった。声の主は誰もいないと思ったのか、足音が遠ざかっていった。

少し落ち着いてきた。辺りは静寂が漂っている。なんとなく、彼女は机の下から出た。そしてゆっくりと廊下に向かう。教室側から廊下の様子をこっそり確認する。誰もいなかった。誰もいないのはいいことかもしれない。しかし一人の今、彼女は孤独を感じた。これでまた血まみれの女の霊でも出たらショックで気絶してそのまま死んでしまうかもしれない。冗談抜きで彼女はそう思った。

まずは仲間を探さないと。それから、ここを出ないと。二階にいた夏雄たちは無事だろうか。ピンチに我先に逃げた自分は卑怯者だろうか。彼女は首を振る。卑怯者じゃない。あんなことがあったのだ。女なら、逃げて当然。真っ先に逃げたとしても皆なら許してくれる。

もしかして皆、怜香に殺されちゃってたりして……。満希は青ざめた。だとしたら、生き残りは私一人？

「誰か助けて」彼女は涙を浮かべて廊下を徘徊した。恐怖を感じたためか、むしようにトイレにいきたくなかった。トイレは確かにすぐ側にある。しかしトイレには入りたくなかった。幽霊がでるという学校のトイレに入るなんて、自殺行為もいいところ、飛んで火に入る夏の虫だと彼女は判断した。それでも、生理現象の強い欲求には逆らえない。しかしトイレには入りたくなかった。

垂れ流しちゃえ。そうすれば、すっきりできる。びちょびちょの廊下になっても誰が笑う？ 霊が笑っても、所詮霊は死人だもの。

しかし羞恥心というのはそうそう簡単に捨てられるものではないよ  
うだ。やはりトイレに行きたい。もう我慢できそうにない。

「満希」

満希は驚愕したとっていいほど驚いた。幸い驚きすぎて悲鳴は  
出なかつた。声のするほうを見ると、小柄な女が立っていた。よく  
見るとそれは唯だつた。唯が不思議そうな顔で満希を見つめていた。  
満希は目をしばたいた。唯、のようだ。

「唯。驚かさないでよ。あんたも逃げてきたの？」

「そう。だつて怖いじゃない？ みんな逃げちゃつたみたいで、怜  
香もどつかいつちゃつたよ。ひとまず安心だね」唯は微笑んだ。

「呑気なこといつて。どこが安心なんだよ」満希は呆れた。唯はも  
う少し繊細な神経をしていると思つたが、かなりお気楽な性格かも  
しれない。なんとなく腹が立つてくる。だが仲間の一人が見つかつ  
ただけでも安心感があつた。我慢していたトイレもいけそうだ。

「ね、トイレ行こう。ちよつと我慢できない」

「こんなときにトイレだなんて、満希も呑気だね」

辛辣な言葉だ。だが尿意は我慢できない。

「何でもいいから付き合つてよ」

「いいよ。でも早くしてね。怜香がこないうちに。あたしがドアの  
前で見張つてるから」

いわれなくても素早く済ませるつもりだ。こんな状況で悠長にト  
イレにいられるか。満希は唯に扉の前で見晴らせて、トイレに入つ  
た。トイレは嫌な匂いがした。一瞬、血の匂いがしたような気がし  
たが、満希は無視した。個室はどれも開いているし、中に死体なん  
ていない。満希はドアが一番近い個室に入るとドアを開けたままジ  
ーンズを脱いで小用を済ませた。その後でトイレの水が出るはずが  
ないことに気づいた。だが考えてみればこんな状態だ。仮に流せる  
としても音を出すのはまずい。黄色く濁つた水をそのままに、ジ  
ーンズを穿きなおすとドアから出ようとした。ドアノブに手をかけよ  
うとしたとき、満希は立ち止まつた。ドアの上半分は磨りガラスに



なっている。ドアの前で見張りをしている唯の形が見える。しかし、どうもおかしい。唯の髪は短い。セミショートの髪だ。だが、ガラス越しから見える唯の髪はどう見てもロングヘアード。

満希は後ずさりした。ドアの外にいないのは、唯ではない。満希はドアの下を見た。ドアの下にはうつすらと、ほんのかすかに隙間がある。満希は恐る恐る屈んで、かすかな隙間からドアの向こう側をのぞいた。

ぼろぼろの白い靴が見えた。学校の上履きのように満希には見えた。白、だったのだろう。今は灰色で、破れた箇所から指が覗いていた。その指の色も灰色だった。ところどころ皮膚が裂け、薄い赤色が見える。

満希は確信する。これは唯ではない。いや、仲間の誰でもない。

「満希？ どうしたの。まだ終わらないの」唯の声がドア越しに聞こえてくる。しかしよく聞くとそれは唯の声とは少し違っていた。ほんの少し。唯と親しい満希だからこそ、その違いがはっきりとわかった。

思えば先ほど唯と会ってからおかしかった。唯を認識する前、それは……一瞬、唯ではなかった。一瞬だが、何か得体の知れない存在が視界に入っていた。それがどんな存在なのかはわからないが、唯ではない、別のものだった。

「もうすぐ。待ってて」満希はそう答えた。声が少し震えているが、向こうは気づいたろうか。

「今、外に出ようとしなかった？」唯の声がはっきりと変化した。微妙な変化だが、明らかにそこに何か別の感情が混ざっている。満希がその声に恐れたのはその声に疑いの色が混じったからではなかった。その声に、愉悦が混じっているのがわかったからだ。

「うん。でも何か急ぎすぎたみたい。ほんの少し待ってて」「おしっこがまだ出るんだね満希。残さずに搾り出すんだよ」

冷や汗が大量に流れる。体が上手く動かない。思考がパニックで正常に作動しない。

「でもさ、そろそろ出てきたほうがいいよ満希。こんなところで呑気してんのは危険だからさ」

ドアノブが回り、扉が開き始めた。満希の全身が凍りついた。

「誰か中にいるの？」

扉の向こうから別の女の声が出た。すると、今までガラス越しに見えていた女の影が、煙のようにふっと消えてしまった。

「中に誰かいる？」

女の声。それから少しだけ開いたドアが開いて誰かが入ってきた。

「満希！」

それは怜香だった。それは普段どおりの怜香だった。様子から、満希はそれがわかった。だが安心はできなかった。

「ねえ、みんなどこにいったの？ 気がついたらあたし一人だけ二階の廊下に立ってたんだ。上で声がしたからきてみたんだけど。それにこれって何なの？」 怜香は血がついた包丁を見せた。

満希は声を上げて後退した。「近寄らないでよ！」

「何で　ねえ、あたしどうしちゃったの？　何で記憶が飛んでるの？」

怜香の顔は青ざめていて、声も震えていた。怜香は本気で今の状況に戸惑っているように見える。そんな様子が満希の警戒心を緩ませた。

「ねえ怜香。説明してあげる。それよりも今、そこに唯がいなかった？」

怜香は首を振った。「だけど唯の声が聞こえたと思ったんだ。それでこっちきたら、満希がいた。唯は一緒じゃないの？」

この怜香はやはり、もう普通の怜香なのかもしれない。どのみち、そうでなければここで自分は一巻の終わりだ。満希は怜香を信用することにした。

「唯とは一緒じゃなかったの。とにかく他の皆を探そ」

足音が遠ざかっても彼らはしばらくじっとしていた。仲間の、ではない。別の何かだ。

夏雄はじつと自分が撮ったカメラの画像を見ている。その顔がやけに青ざめているので唯は気になった。

「ちょっと見せてよ」

夏雄は首を振った。

「いや、何も写ってないよ」

唯はすぐに夏雄が嘘をついているとわかった。カメラをひったくる。

「何をしているんだ？」昌樹が呆れた顔をする。「今はそんなことをしているときじゃないだろ」

「お前こそ黙れよ」夏雄が辛辣に言った。

昌樹は口をつぐんだ。

唯はカメラの画像を見た。廃校の外の写真。窓から侵入した後。

廊下。唯はぞくぞくとした。廊下中に亡霊達の影が写っている。血まみれのセーラー服、ブレザーの男子生徒。私服の連中もいる。画像をさらに見る。トイレには無数の手。教室には席に座ってこちらを見てにやついている少女の姿があった。この少女の姿はどこなく奇妙だ。いやに白い肌。そして、口元は歪んでいるものの、目は真っ黒だった。それが、立ち上がった。

唯は軽い悲鳴を上げた。夏雄がすぐに唯の口を手でふさぐ。

「だから見ないほうがいいっていったら？」

夏雄は手を離した。

「違う　今、この写真の霊が動いたの」

唯は夏雄にカメラを見せる。

「動いた？　別に、座ってるぜ。しかし不気味な霊だよな。他のと違う。明らかにこっちを認識してる」

唯はカメラを見る。少女の霊は座っていた。最初に見たときと全く同じ姿のまま。

「だけど見間違えたとは思えないんだけどな……なんだか、誰かに似てるような気がする。身近な誰かに。あたし達の中の誰かに、さ」しばらく沈黙が続いた。沈黙を破つたのは昌樹だった。

「もういいだろ。隠れるならここよりいい場所はいくらでもあるし、智史のところに向かうべきだよ」

「わかった。出よう」夏雄も仕方ないとそれに応じた。

ゆっくりゆっくりと扉を開ける。夏雄は首を外に出した。廊下には何もいない。三人は外に出て、なるべく音を立てずに廊下を歩いた。最初にいた棟に戻るつもりだったが、夏雄は立ち止まった。渡り廊下の向こうに何者かの姿があった。先ほどの血まみれの少女の一人が、彼らの行き手を阻むように立っている。

夏雄は舌打ちした。「あれじゃ戻れないぞ」

「あれって幽霊なの？」

「さあな。どっちにしろ、あんなのがいたら通れないだろ。霊体なら素通りできるかもしれないけど、試してみるか？」

唯は首を振った。「絶対嫌」

「じゃあどうする？　ここを通る以外に向こうへ渡る道はない」昌樹が言う。

「わかってるよ」夏雄は苛立った。頭を回転させて打つ手を考えるが、思い浮かぶ手段は何もない。

くそっ！　なんだってこんな目に？　しかし、夏雄は思う。これは自業自得ってやつなんだろうか。興味本位で魔の住み着く場所に来た自分達に対する仕打ちなのだろうか。

「じゃあこうしよう。俺が囮になる。お前達はいいつをうまく撒け。そして智史の場所に」

「やめなよ夏雄。危ないよ。智史も心配だけど、夏雄があいつに何かされたら同じことじゃん」

「だけど、他に手はないぞ」唯の心配は素直に嬉しかった。

夏雄はこの期に及んで自分の霊的な力を思い出した。そうだ、あれを使えば　あれが霊なら、可能なはずだ。

「おい」

不意に背後から太い声がしたので三人は驚いて振り返った。背の高い、小太りで茶色い髪を薄汚く伸ばしたチエックのポロシャツを着た男が立っていた。三人に対して疑いの目を向ける男はふつくとした丸い頬をしているがそれとは裏腹な目つきの鋭さで、強面な印象を三人に与えた。

「何だよ、お前」夏雄が敵愾心あらわに言った。

「お前からこそなんだよ……」男はそう言った後に疑いの目を緩めた。だが目つきの鋭さは男の特徴のようだ。表情の変化は希薄だったが、男は少し穏やかな様子になった。「お前達も幽霊見たさでここに入り込んだ口か？」

「あんたもそうなのか。一人か？」

「こつちこいよ」

夏雄たちは男の後ろについていった。男は足早に大またで歩き、家庭科室の扉の前に立った。そして男は夏雄たちに向けて手で待つてると合図した。夏雄たちはそれに従った。男が家庭科室に入っている。それから色々話し声が聴こえてきた。別の男の声、女の声もある。全部で三人だろうか。夏雄はそう推測した。

扉が開いて小太りの男が出てきた。「入れよ」

夏雄たちは中に入った。家庭科室の中には小太りの男と、茶髪を異様なまでに伸ばした日焼けした背の高い、青いタンクトップ姿の男がいた。男は面長で日焼けしすぎて顔が実に黒かった。男は三人をぼんやりと見ている。男二人に対して女は一人。赤いＴシャツにジーンズを穿いた長い黒髪の女。満希と少し似たタイプの女が三人をまるで化物でも見るかのような顔で眺めていた。

「何だ何だ？」長身の男が薄ら笑いを浮かべていった。

「俺たちと一緒にここに侵入したらしい」

「それで同じ目にあったってわけか」長髪の男はせせら笑った。

「何がおかしいんだよ」夏雄がくっつかかる。

「だって同じ日に二組もこんな場所に侵入するなんて、笑えね？」

「笑えねえよ」夏雄は本気でそう思った。何も笑えねえ。

「だよなあ」男は何を考えているのかわからないような笑みを浮かべる。「でさ、俺はこう思うんだ。やっぱりお前らも霊かなんかだろ？ 騙されないって、俺はよ」

「それはこっちの台詞だよ」先ほどまで脅えていた唯が噛みついた。

「あたし達だってあんた達が幽霊かどうか疑ってるんだから。どうなの？ もし本物の人間なら、この廃校にきた目的を教えてください」

「あたしたちは幽霊が出るっていうから、ここに入ってきたんだよ」長身の女がいだした。「あたし長瀬美奈。この春人って奴が」といって女は長身長髪の男を指差した。「ここに霊がでるっていつて無理やり誘われたの」

「あたし浅海唯。あたしたちも霊がでるって噂を聞いてやってきたの」

こんなときに自己紹介かよ、と夏雄は心の中で舌打ちした。

長髪の男、春人が笑った。「とりあえずあんたらが霊じゃなくて外からきた人間だってことは信じることにするよ」

「で、お前らもここから出られなくて困ってるわけだろ？」

小太りの男が訊くので夏雄は頷いた。

「じゃあ、共同戦線を張ろう。俺達七人でここを抜け出すんだ」

「でも美紅はどうなるの？」長瀬美菜と名乗った女が言う。

「いい忘れてたけど俺達の仲間はおと五人いるんだ」七人という言葉葉に反応して昌樹がいった。

「あと五人？」長髪の春人が驚いた声を出す。「随分大勢じゃん。俺達にも後一人仲間がいたんだけど、そろそろ帰るかってときに突然おかしくなっちゃってさ。参った参った」

春人の話は夏雄達の状況とそっくりだった。美紅という女が突如狂い、仲間を襲いだしたというのは、怜香とそっくりだと夏雄たちは感じた。

夏雄はそんな彼らにシンパシーを覚えもしたが、どこか違和感を覚えた。目の前には、廃屋に閉じ込められた哀れな者が三名。どうも引つかかる。彼らに敵意は見えない。そうじゃない。何か、別の意味で夏雄は彼らのことを疑った。

夏雄は唯を見た。彼女も同じように、何かを感じているようだ。目を見れば、それがわかる。

「まずお前達の仲間を見つけ出そう。こっちの美紅とその怜香って女は要注意ってことだな。早くここを出よう。もう廃屋巡りなんてうんざりだ」

夏雄たち六人は廊下に出た。出た途端に血まみれの少女の霊が現れた。夏雄は驚いて身が竦んだが、新たな仲間達は全く動じなかった。

「これは脅すだけだ。俺達に何かできるわけじゃない」小太りの男がいった。

「だけど、包丁があるぞ？」

「大丈夫だ。霊の色を見る。うつすら透けてるだろ？ こいつらははったりだけだ」小太りの男がそういつて幽霊に近づいていく。そして、霊の体をするりとすり抜けた。女の霊は何もしてこない。ただそこに立って、恨みがましい目で各人をにらみつけている。そして霊はすつと消えた。

「脅すこともできないとわかると奴らは消えるんだ」小太りの男が説明した。「ああ、透けてない奴は駄目だ。あれは実体があるから」昌樹が突き飛ばしたのを夏雄達は確認していた。

「いろんなタイプがいるんだな。見極めろってことか」夏雄が言う。「まあ、あいつらは実体があっても鈍いからいい」春人が笑みを見せる。顔に笑みを湛えているが、その目には恐怖の色が見えた。それが夏雄を不安にさせた。

「何だよ？」

「あんな雑魚ばかりじゃねえってこと。出てきたらマジで全力で逃げないといけないうって奴がいる。気をつける。唐突に出てくるか

らな。出たら、逃げるしかない」

六人は渡り廊下を渡る。先ほど廊下の奥で待ち構えていた少女霊はいなくなっている。しかしその代わりに、別の何者かが突き当たりから現れてこちらに向かってきていた。



「怜香、なんともないの？」階段を下りて一階に向かいながら満希が尋ねる。

「別に。何で？」

「なんでもない。ごめん」

満希はいわないことにした。怜香が智史を刺したという事実を。

あの子の怜香が怜香ではなかったとしても、それでもこれはいべきではないだろう。

一階にたどり着く。廊下を見渡すが、智史の姿がない。

「智史がいない！」満希は慌てて智史が倒れていた場所に向かった。智史がどうしたの？怜香はわけがわからずに満希の後を追う。

間違いなく智史が倒れている場所を満希は見た。その場所に智史はいなかったが、血の跡は生々しく残っている。出血は多い。しかし思ったほどではない。人がどのくらい血を失ったら死ぬのか満希は知らなかったが、まだ致死量にはいたらないだろうと希望的推測を立てる。人体の中を流れる血液というのは思っている以上に多いはずだ。

よく見ると血痕の後が奥に続いている。満希はそれをたどった。そしてたどり着いた先は保健室だった。満希は保健室の扉を開けた。薬が転がっている保健室には智史の姿も、誰の姿もなかった。床の血痕を見れば、智史がここに来たのは一目瞭然だ。智史はどこにいったんだろう？満希は机を見た。血まみれの包帯がある。満希はすぐにわかった。智史はここに治療をしにきたのだ。しかし包帯を巻いたくらいで止血するだろうか。いや、そもそも刺されたのだから止血だけで済む問題じゃない。一刻も早く病院にいかねばならない。だが智史の姿は見当たらない。

満希は涙が出てきた。智志。この恐怖そのものの状況の中、智志がいなくてはとうすればいいのか、満希にはわからなかった。

「満希、智志いた？」怜香も入ってくる。

「智志はいない。でもね、智志はどこかで必ず生きてるよ。探さない」と

「うん……」怜香には何かなんだかわからないようだった。しかし満希の思いつめたような、半ば虚ろな顔を見て、それから床にある血痕をみて、何か不吉な思いを抱いたようではあった。

二人は廊下に出る。そこに青い七部丈のＴシャツにゆったりとしたショートパンツ姿の女が一人通りかかった。その女にまるで見覚えがなかったので二人の体に戦慄が走ったが、先に女のほうが二人を見て悲鳴を上げた。

「誰！」女が叫んだ。

二人は女を警戒する。女の手には包丁が握られていたからだ。

女は怪訝な目で二人を眺めていたが、相手の脅えきった様子を見て少し冷静になったようだ。そして二人が脅えているのは自分が持っている包丁が原因だとわかったのか、女は包丁を静かに床に置いた。

「ご、ごめん。大丈夫。大丈夫だから……。あたし二宮美紅っていうの。二人とも、もしかしてこの情報知ってきたの？ やっぱりここ有名なんだね。包丁は捨てたよ。あたしも何であれ持ってたのかわからなかったんだ」

満希と怜香は安心したわけではなかったが、満希は勘を利かせた。

「ねえ、他に仲間がいるの？」満希は話しかけてみた。

「そう。だから仲間を探してるの。気がついたときには一人ぼっちだったの。変な話でしょ？」美紅という女はわざとらしい、同情を誘うような顔つきをして見せた。白々しかったが、それが逆に二人の警戒を解かせた。騙したいわけじゃないのだろう。こういう性格に違いない。変な女というわけだ。

「ねえ、他に三人いるの。探すの手伝ってくれない？」

「いいけどあたしたちの仲間を探すのも手伝ってもらおうよ」満希が応じる。

「いいよ。ならば、探してみようよ。外に出てないとしたら、すぐに見つかるはずだから」

樂觀的な女だと満希は思った。状況がまだ見えていないようだ。だが不安な気持ちは二宮美紅という女のおかげで幾分薄らぎ、仲間を見つけてここを脱出するという希望が少し膨らんできていた。

三人は廊下を歩いた。ともかく、手当たり次第に探してみよう。大丈夫。やれる。満希はそう自分に言い聞かせた。

一階の教室を一通り見回す。誰の姿も見えない。すぐに探索は終了した。それならばと三人は二階へ。そして、手当たり次第の教室を見回したが、誰もいなかった。

「さっきの幽霊、いなくなっちゃったみたい」満希はほっとしたようにいう。

「幽霊って何の話？」美紅がいう。「ここに幽霊が出るの？」

怜香が何をいつているの、という顔で満希を見る。満希は説明することにした。怜香は脅えるだろうが、致し方ない。

「包丁を持った血まみれの少女の霊か。なんだかリアルティのない。霊がナイフなんてさ」美紅がけらけらと笑い、満希はあまり声を上げないようにしてくれと思った。

「満希、それって本当なの？」怜香が案の定、脅えきった顔つきでいった。

「本当だってば」

「そんなのが出たら全速力で逃げるしかないよね」美紅は半信半疑と言った様子だった。だが満希は構わなかった。信じようと、信じまいと霊は出る。

手当たり次第に教室を見ていくが、誰もいない。見捨てられた教室内には空虚な雰囲気漂っている。寒々しい光景だった。一昔前には生徒で賑わい、教壇に立って熱弁を振るう教師の姿があったのだろう。

ここは空虚だ、と満希は思った。自分たちが安易に来た場所は、時が停滞している。ここは人がもういなく、人々の記憶からも忘れ

去られた場所なのだ。

涙が出る。そんなことは最初からわかっているはずだった。廃屋にはいつもきているし、恐怖体験は何度も経験しているというのに。しかし、奇妙なこの状況に陥った今、本当に廃屋という場所の寂しさと切なさかわかったような気がした。今はここに人の息吹はなく、ただただ静寂があるのみだ。

しかしその静寂の中に、ある種の支配がある。それが満希には僅かながら感じ取れた。それが何なのかはよくわからない。だがその支配を実行している存在が、自分達に対し敵意を持っているのは明らかだった。

仲間と離れ離れになり恐怖を感じている今、満希は更なる恐怖を思い知った。孤独。そしてその孤独を自分が感じている理由は、この校舎だけではなく、智志がいないからだ。

「あつちの棟にもいつてみようか？」怜香が渡り廊下の向こうを指差した。

「その前に三階にいつてみようよ」美紅がいう。

三階に向かう。階段を、なるべく音を立てずに向かう。

「ところで二人は何歳なの？」美紅が聞いてくる。

「二人とも二十歳」満希はこの状況でと思いながらも小声で答えた。「へえ、若いね。あたしは二十三。お二人よりお姉さんなんだよ」

満希は少し意外に感じた。似たような年齢だと思った。女の顔が童顔だったからだろう。だが確かにそういう年齢だとわかってみると、そう見えなくもなかった。だが今はそんなこと、どうでもいい。

「ね、二人はどこでこの情報を知ったの？」

「ネット」満希はどうでもよさそうに答えた。少し黙っててくれな

いかな。  
「あたし達は知り合いの人がここに忍び込んでね、そのまま帰ってこなかったの。それで、自分達もいつてみようってことになって」「帰ってこなかった？」怜香が慌てて聞き返した。

「そう。だってここって入ったら帰ってこれないって噂の校舎

じゃん？ だから意気揚々と皆で忍んできたわけ。でも拍子抜けしちゃった。ただの廃屋なんだもん。三階到着。やっぱり静かだね」  
三階の廊下には誰の姿も見えなかった。彼女らは順繰りに教室を見ていく。

「誰もいない……やっぱり外に出ちゃったのかな。ということはあ  
たし置き去りにされたってこと？ まいったな」美紅が呟く。

「外なんて出られないじゃない」と満希。

「そうかな」

「窓だつて割れないし」

三人は教室の中に入り、椅子に腰を下ろして一休みすることに  
した。

沈黙。だが別に、気まずいとか、何か話題を振る舞うとか、そう  
いう場面でもないの、三人は気ままに体を休めた。

教室内に張り詰める冷気のようなものに、満希は気付いていた。

満希は怜香が自分以上にそれを感じていることを知っていた。怜香  
は靈感が強い。智志が言っていた。彼女は、智志自身を除けばこの  
中では最強の浄霊師になれると。この冷たい空気は明らかに靈氣  
だ。立ちこめるその不浄な空気は、邪悪なものだと満希にはわかっ  
た。隣にいる怜香もそれを敏感に嗅ぎ取っているはず。

「こちらはさ、最初は大きく仲がいいわけじゃなかったんだ」

美紅が急に、ゆっくりと喋り始めた。

「一緒にきた春人っていうのもう一人の美菜っていうのが付き合  
つてて、あ、もう別れたんだけど。それで、まあ美菜とあたしは  
昔からの親友で。廃墟ツアーなんて思いついたのは春人なんだ。そ  
れで春人の友達の併せて四人でここに来たんだよね。ここに来たの  
は春人と美菜をまた仲良くしちゃおうっていう計画でもあったんだ  
けど、全然駄目。あいつら仲悪くないんだけど、もう一線越えるこ  
とはないみたいで、余所余所しっていうか、普通の友達って感じ  
なんだ」

さあ、どうしよう。満希は考える。この馬鹿女、こんなところで

くだらない話をし始めて。長々と続くようなら、静止させないと。こんなところでべらべら喋られて幽霊を引き寄せても困るし。

「まあ仕方ないかって、春人の友達　そいつは勝也っていうんだけど。ちよつと太めだから別に興味はないんだけど、目つきのわりに良い奴なの。まあそいつと相談して、これは無理だから、普通に肝試し気分楽しんでなら四人でカラオケでも行こうって話になったの」

「でも行けなかったんですね。可哀想」怜香が同情する。

満希は嘆息する。向こうの事情などどうでもいい。それにここにいっただけでも仕方がない。一休みは終わりにしたほうがよさそうだ。他の仲間が気になって仕方がない。

「そろそろ行こうよ。みんなが心配なんでしょう」

「オツケー。ちよつと体力回復したよ」美紅が言う。

三人は廊下に出たが、なんとなく感じる冷たさと、不気味な気配を感じた。

「あれって誰だろう？」

怜香が何かを指差した。二人が指差したほうを見た。廊下の端に何か立っていた。そこは暗く、ぼんやりと影で見えない。

「誰がいるね」美紅がいう。

「よく見えないけど」と怜香。

影がゆっくりと動いた。暗がりから出てきたその正体は背の高い女だった。女は白いワンピースを着ていた。ワンピースは血まみれの少女のように血にまみれてはいないが、ぼろぼろだ。女の髪は長く、その目は何を考えているのかわからない闇色だった。女の表情は人形のようにではあったがすっきりと通った鼻をしている。見てくれはかなりの美人だ。

美しい、と満希は恐怖を感じながらも思ってしまった。

「あれってあんた達の仲間？」美紅が小声で聞く。

「じゃあそっちの仲間じゃないんだ」満希は自分の中で確認するようにそう返し、背筋を凍らせた。目の前にいるのは一体何なのだろう

う。ただなんとなく、こちらに対し友好的な存在ではないだろうという感じはした。それが怖かった。

女の顔が唐突に変化した。人間の皮膚の色ではありえないような白さ。その目が、完全に黒く塗りつぶされ、目から赤い血を流し始めた。

三人は得体の知れない恐怖に後ずさった。

女がゆっくりと動いた。しごく自然な動きだった。しかし妙だった。満希には女が何重にも見えた。女が動くたびに、残像のように幾つも女の影がちらつく。

その光景は怜香には耐えられなかった。彼女は絶叫し、逃げ出した。満希と美紅も走った。

逃げながら満希は背後をちらりと窺った。女は普通の動作で歩いてるが、それなのに間隔がかなり縮まっていた。もはや女はすぐ背後までできていた。

背中を掴まれた手ごたえ。満希は思わず振り返った。

漆黒の闇を携えた二つの目が満希を見ていた。じっと見ているとその目の中に吸い込まれそうだ。女の瞳のない目からは絶えず血が流れている。

掴まれた箇所がいやに冷たい。

「あなたも死にたいんでしょう？」女が喋った。その声は、女の声ではなかった。男の声でもなかった。ありえないほど低く、そしてありえないほど高い声が混ざりあったかのような声。深い地下の底から岩の隙間を通って聞こえてくるような声。耳がおかしくなる、いや、その前に脳がおかしくなってしまうだろうと満希は本気で思った。

「死にたくない」満希はかすかな声でそういった。

女の目は不思議そうに満希を見た。肩を掴む力が強くなった。

痛い、と思った瞬間に、唐突に満希の頭の中であるビジョンが浮かんできた。

集団で暴行されたワンピース姿の女性。彼女は何度も何度も輪姦され、そして最後には金属の棒で叩き殺され、車で運ばれ山に埋められた。その山に彼女は今もなお、埋められている。

「やめて！」満希は思わず女を突き飛ばした。そして素早く逃げ出し、怜香たちが降りていった階段に駆け出した。

二階の廊下には怜香も美紅の姿もない。満希は焦って辺りを見渡し、とりあえず二年D組の教室に逃げ込んだ。窓のほうへ向かい、足が見えるのを承知でカーテンの中に身を隠した。目を瞑る。心臓の鼓動が大きい。怜香はどこにいったんだろう？

足音が聞こえない。だが油断はできない。満希は何も見たくなかったので目をずっと閉じていた。もう何も見たくなかった。カーテンが開けられても、あの姿を見たくない。死にたくはないけど、恐怖に支配されて殺されるのは嫌だった。

「助けて」彼女は小さく呟いた。

時間は経ったが、一向に何の物音も聞こえない。なので満希は目を開き、カーテンを開いた。がらんとした空間がそこにあり、誰の姿もなかった。ほっとする。しかし今度は孤独感が襲ってきた。

智志を探さないと。満希は教室に出た。廊下に誰の姿もないのが安心していいのか、不安になるのか、彼女にはよくわからない。せめて怜香がいてくれれば。広、夏雄、それに唯も。みんなどこにいったのだろう？

三階にいくのは自殺行為だ。一階に向かうか、それとも隣の棟へいくか。満希は渡り廊下を進むことにした。渡り廊下へ向かう。途中で物音がしたので立ち止まる。音は教室の中から聴こえた。

怜香か、と満希は思ったが、そこにいたのは悠子だった。

「満希」戸惑いの色を浮かべていた悠子が笑顔になる。「びっくりした。誰かと思っちゃった」

「こんなところで何やってんの？」

「隠れてたの。血まみれでセーラー服姿の女たちから」



「ねえ、智志たちがどこにいるか知らない？ 怜香たちもいなくなっちゃったの」

「わからないけど、一緒に探そうよ。特に智志は必ず見つけ出さないと。こっちのほうには誰もいないみたいなの。向こう側にいってみようよ」

「そうね」満希は答えた。「今までここにいたの？」

「ううん。あちこち歩きまわってみんな探してた。満希しか見つけてないけど」

悠子も色々大変だったのだろう。満希は納得した。

しかし……誰が見つけると、誰がいなくなる。智志も心配。満希は焦りを覚えた。

夏雄たちの前に現れたのは、夏雄たちのメンツではよく知っている者だった。

「広！」夏雄は歓喜の声を上げた。

「夏雄！」広が笑みを浮かべた。

「あの後どうしたんだよ？」

「よくわかんね。何か、怜香が俺を見逃してくれたんだよな。その後智志を探したんだけど、智志はいなかった」

「すぐに探そう。満希も見つけないと。急いでここから出るぞ」

「だけど全員見つけてどうなるってんだ？ こっからどうやって出るんだよ」

夏雄は返答に困った。それが一番の問題だ。全員揃ってもここから出られなくては意味がない。

「出口はある」勝也が言った。

「誰だこれ？」広が今更警戒する。

「大丈夫だヒロ。こちら俺達と一緒にここに侵入して出られなくなったらしい」

「俺達みたいの間抜けだな」

「……で、出口って？ どこだにあるんだ？」夏雄は勝也の言葉を聞き逃していなかった。

「こつちにこいよ」

怪しみながらも勝也についていき、たどり着いた先は化学実験室だ。勝也が黒板を指差している。

夏雄は黒板を見た。黒板には他の教室によくあったような落書きはなく、すつきりとした字で何か書かれてあった。

「この校舎より出る方法は一つ。正面玄関の鍵を開けよ。鍵は校内のどこかにある。食堂のテーブルの下にヒントがある」夏雄は黒板に書かれている事柄を読み上げた。

「この校舎のどこかに鍵が隠れているってことなのか」昌樹が聞いた。

「そういうことでしょ」と美菜が答えた。

「食堂にいけばヒントが見つかるってことだよな。食堂には？」夏雄が尋ねる。

「行った。テーブルの下には紙切れがあつて、『鍵が欲しいのなら音楽室を尋ねろ』って。俺たちは音楽室に行こうとしたんだけど、あそこ付近にはおっかない幽霊がでるからいけないんだ」

「あれは確かに怖いけど、こんだけ大所帯ならなんとかならないか？」春人が言った。「必ず出るってわけじゃないしさ。早いとこ鍵を見つけてここから出よう。こんなところさつさと抜け出したい」

夏雄は今から自分達がしなくてはならないことを頭の中で整理した。まずは智志を優先に散らばった仲間を全部見つけ出すこと。それから、鍵を見つける。そしてここから脱出。怜香はどうするか。外に出たら何もかも元通りになる。そう信じよう。

とはいえ、ここから先、何もかもうまくいくとは思えない。夏雄は全てを楽観視することはできないでいた。あまりにもこちらが不利だ。

広が夏雄の肩を叩いた。

「大丈夫だつて。早くいくぞ。全員無事でいるって」

夏雄は頷いた。

化学室から出る。色々知っている四人はなかなか心強そうだし、このメンツで探せば他のメンバーもすぐに見つけ出すことができるかもしれない。

筆頭に立ったのは勝也と春人の二人。二人はまるで俺達についてこいといわんばかりに威風堂々と先陣をきる。

夏雄は唯を見た。いざとなったら、彼女だけは自分が守ると夏雄は心に決めていた。今更誓うまでもない。廃墟巡りのときに彼はいつも唯に軽い口調でそう言っていた。

「唯は小さいからな。危ないときは守ってやるよ」

「小さいっていうな。夏雄だって広より全然小さいくせに」  
そう言うのと唯は唇を尖らせるのだ。

よかった。少し余裕が出てきたみたいだ。冷静になっている。

「みんなどこにいるんだよお！」広が突然大声で騒いだ。

「ばかやるう！」勝也と春人が広を制止させる。

「何だよ、呼べばてつとりばやいじゃん」

「だからってそんな大声出したら余計な奴まで呼んじゃうだろうが！」勝也の顔は怒鳴って真っ赤になっている。

「あんたのお仲間、ちよつと軽率だぜ」

春人が夏雄に小声で言う。その通りだとは夏雄も思ったが、春人のような容姿の者には広とはいえ言われたくはないだろう。いくら広とはいえどもだ。

「勝也と春人も十分うるさいから」美菜が笑った。

窓の外を夏雄は見る。少しだけ、雨が降り始めている。雨音があまり激しくならなければいいなと彼は思った。こんな中で雨の音を聞く不安もいや増す。

他の連中は無事だろうか。考えているうちに仲間たちの背中が遠ざかっていく。慌てて後を追う。

「音楽室にいくんだろ」歩きながら夏雄がきいた。

「ああ。部屋の中を探してみるしかないんじゃないか」勝也が答えた。

この広い校舎を隅々まで？ 骨が折れる作業だ。だがやるしかないんだろうな。

「かったるいな。学校中を歩き回ってよ。つたく、何もかもあのママのせいだ。美紅の奴、どこにいつちまったんだよ、イカレ女め」  
春人がいない者に罵声を浴びせる。

「よしてよ、美紅だって好きでやったわけじゃないんだって」

「どうだか。あいつは元々変な女だったよ」

一同は階段を下りた。階段の下で女の霊が待ち構えていた。うつすらと半透明で、足が見えない。虚ろな目はどこか寂しげだった。

「しっつけえな。消える！春人が怒気を含んだ声を出した。すると女の霊はふっと消えた。

階下にたどり着く。相変わらず薄暗い静寂な廊下が続いている。夏雄は腹を鳴らした。時計を見るとそろそろ昼になる。他の連中も腹が減っているはずだ。ポーチには御握りがまだあるが、今は食べる頃合いではない。

視聴覚室、工作室、家庭科室などがある。茶道部の部室などもある。誰かがいる気配はなさそうだ。

「俺たちもそうだけど、あんたらの仲間もここどこかに隠れてる可能性もあるな」夏雄が言う。

「探してみる価値はあるかな」唯が言った。

「好きにしなよ」春人が言った。

八人は手分けしてその階を探索した。夏雄は茶室に入り、どことなく異質な様子の空間の中を探ってみた。だが鍵のようなものはどこにもなかった。工作室の机をくまなく探してみるが、何も見つからなかった。

「仲間捜しのヒントでもあればな」広がぼやいた。

「徹底的に探してみるしかないだろ」夏雄は答える。焦るが、それしかないのだろう。と、ふいに夏雄の耳に誰かの泣き声が聞こえてきた。ゆっくりと、しくしくという表現がよく似合う、思わず同情を覚えてしまうすすり泣く女の声。

夏雄の体に戦慄が走った。一体誰が泣いている？

廊下の外に出る。全員集まっている。きよるきよると辺りを見回している。泣き声の主を探しているが、どこにいるのかわからないという様子だった。

夏雄は声のするほうへと向かっていった。鳴き声は奥のほう  
漫画研究部の扉の中のようなのだ。

「夏雄？」

背後で唯の声がしたが、それには応じない。夏雄は扉の前に立った。泣き声は扉の奥から聞こえてくるのは間違いない。扉を開けて

みようか、ためらう。もしかしたら、自分の仲間が一人脅えて泣きはらしているのかもしれない。

「夏雄？」

今度の声は唯ではなく、扉の奥から聞こえてきた。夏雄は魅入られたように扉を開けようとした。

しかし、扉を開こうとしている右手が押さえられた。大きく、力強い手によって。勝也が夏雄を制止したのだ。

「なんだよ？」

男は首を振った。そして小声で言った。「やめる。この中にはお前の仲間はいない」

邪魔された夏雄は腹立たしい思いに駆られたが彼は落ち着くように努めた。冷静に、冷静にだ。クールにならなければ、生き残れない。

（クールになればよ、夏雄。お前はいい能力者になる。いいセンスを保持てるんだ。そうじゃないぜ？ 冷静になれば、大丈夫だ）

そうだ。あれ以来、俺は冷静に周囲の状況を掴もうと思ってやってきた。それは功を奏してきた。今だって、そうだ。冷静になれ。

「この中には何がいるんだ？」夏雄も小声で訊く。

「畏だよ。一度入った。もう一度入る意味はない」

夏雄は勝也の太い手を振り払った。

泣き声はまだ聴こえる。わかっていることだった。これは、こんなわざとらしい声で泣く女は仲間にはいないということくらい。途端に恐怖がわきあがってくる。

「悪かった」夏雄は謝罪した。

「よし。戻ろう。いいか、俺達は遊ばれてるんだ。気をつけてくれ」この男は悪い男ではなさそうだと夏雄は思った。まだまだ完全に信頼はできないが。と、いつもの彼らに最初に感じた違和感がどうしてもぬぐい取れないのだ。

目の前には音楽室があり、扉はすでに開いているので八人はそのまま中に入った。音楽室は普通の音楽室だ。作曲家の絵が飾られ、

電子オルガンが置いてある。机などの並びは綺麗なものだが、床にはクラシックギターやフルートなどが乱雑に置かれてあった。

「音楽室の悪霊は散歩中らしいな」春人が言った。「あの白いワンピースは俺のトラウマなんだ。いないならいい。とっとと調べてもらかろう」

彼らは分担してそれぞれ隈無く散策した。広が見つけたようで、全員を集めた。名もよく知らないロマン派の音楽家の絵の裏を調べると、そこに赤い字で、『ゴミ箱の中に鍵がある』と書かれてあった。

「どこのゴミ箱だよ」春人が頭を掻いた。

「ゴミ箱……教室中にゴミ箱はあるな。全部回ってゴミ箱を探すなんて骨だぞ」

八人を集合させると勝也がゆっくりとさっきの場所に戻れと指示した。なるべく音を立てずに八人は階段を上がり、また家庭科室に戻った。戻る際に立ち寄れる教室のゴミ箱を調べたが、収穫はなかった。家庭科室のゴミ箱も空っぽだった。

結局、収穫はなかった。八人は重苦しい沈黙に包まれていた。雨が止み、天気のよくなりそうだった窓の外は再び曇天に変わっていた。

夏雄は時刻を調べた。十一時を過ぎている。気が焦るが、まだまだここから脱出できそうもない。

「で、次はどうする？」広が言った。

「あんまり変わらないだろ。ゴミ箱を漁りながら仲間を捜す」昌樹が言った。

「三階から行ってみるか」春人が言った。

再び廊下に出て階段を上へ。踊り場から見上げた階上には血染めのセーラー服が待っていたが、八人を脅かすほどではなかった。セーラー服の少女は彼らを挑発するかのよう細めた目で見下ろし、立ち消えた。

「大丈夫なのかよ？」広が不安の声を発する。

「あんなのびびってらんないって」春人が答えた。

三階に足を踏み入れる。夏雄たちが躊躇したのは、廊下の薄暗さが際立っていることだ。暗い影が廊下全体を覆っている。その中に入っていくのはためらわれる。闇の中に飲み込まれる、そんな恐怖感を覚えてしまう。彼らはぞっとしない思いでその場に立ち尽くした。

「とにかく 手当たり次第見て回るしかないだろ」春人が言う。彼自身、怯えた顔をしている。

「しかなさそうだね」唯が言った。



三階は文化部の部室がほとんどのようだ。演劇部、写真部、パソコン部、吹奏楽部、無線部。

そのほとんど全てに興味がそそらないが、彼らは一応一つ一つの部屋に入り、仲間とヒントを得るためにゴミ箱の中を探した。

夏雄がパソコン部に入ると唯もついてきた。パソコン部は暗かった。夏雄は試しに電気のスイッチをオンにしてみた。

電気がついた。

「え、なんで……」唯が呆然とする。

「こついうところなんだよ」夏雄は不気味な感覚を抱いた。

明るくよく見えるようになったパソコン部は狭く、その空間に所狭しとパソコンが置かれてある。二人は一応、パソコンや机の中を調べてみた。

「何もないみたいだね」机の引き出しを閉めると唯が言った。「机の下にゴミ箱があるけど、何も入ってないし、何か書かれた後ものささそうだね」

夏雄は手に持って全体を眺めてみた。普通のゴミ箱のようだ。

「出るか」

機動音がした。一台のパソコンのディスプレイが光る。唯は慌てて夏雄の後ろに下がった。

「何なの？」

夏雄は光るディスプレイに近づいてみた。ディスプレイはスクリーンセーバーの状態のようだ。縦から横に文字が流れている。夏雄はその文字を読んでみた。

「ココカラハデラレナイヨ！」

「そう書いてあるの？」唯が聞いた。

夏雄は頷いた。「明らかに嫌がらせだな」

ひんやりとしたものを味わいつつも、二人は部屋を出、廊下で他の連中を待った。ほどなくして全員が揃った。

「何も無いな」昌樹が言う。

ため息が漏れる。焦燥感が募る中、彼らは苛立ちを抑えつつ何か

手はないか思い巡らせた。

「他の場所を探っていくしかないんだろっな」勝也が言った。

「とりあえず……戻ろうよ」唯が力なくそう言った。

家庭科室に戻った八人は意気消沈していた。次に行くべき場所を決めるのは容易い。しかし、どうも成果が得られる気がしないという思いがあった。それに徘徊するには不気味な廊下も気にいらなかった。普段とは明らかに違う異質なる場所を歩いているという気にさせるのだ。ここでは実体はないが、亡霊が視認できる。そして中には凶悪な亡霊もいるのではないかという恐れが、一同を萎縮させる。

「呪われてるんだね、ここはさ」今更ながら唯が言う。

「まさしく呪われた校舎だ」夏雄が応じる。

「しかしさあ、変だぜ。これって心霊現象なのか？」広が言った。

「心霊現象が俺達を外に出させなくしたり、鍵を探させたりするのは？　まるで誰かの悪戯みたいじゃんか」

夏雄は過去の心霊体験のことに思いをはせる。似たようなことはあったが、これほど酷くなかった。ときたま、霊以上の存在が絡んでいることもあった。果たして、これもそうなのだろうか。

「やっぱり転校生原因説かな」

長瀬奈美がそう言ったが、夏雄たちにはそれが何を意味するのかわからなかった。ただ、昌樹だけが奈美の言葉に強く反応した。それに気づいたのは唯だけだった。

「知らない？　この学校がおかしくなる前に、転校生がいたって話。丁度その転校生がきてからおかしなことが次々と起こるようになって話だ。あれ、ウェブサイトにもそんな考察があったんだけどな」

「ああ、そういえば見たような気がする」夏雄が言った。「その転校生が全ての発端だってこと？」

「そういう話だよな。その転校生が何者なのか知らんけど」春人が応じた。

転校生か。夏雄は思う。俺達はそいつに遊ばれているのか？ そいつは霊じゃないのか？ 何か得体の知れない超自然的存在なのだろうか。考えれば考えるほど寒気がする。

「ま、誰が元凶なんてのは今はどうでもいい話だよ」勝也が自嘲的に笑った。

沈黙が降りる。これからどうすればいいのか、一同は不安だった。「腹減ったな」広が言った。

「さっき握り飯やったばかりなのに」夏雄が苦笑する。

「あんなんじゃないよ」

「……あんたら余裕あるな。俺はそんな気になれない」勝也が言う。

夏雄はポーチから御握りを取り出して広に放った。広は礼を言うと早速食べ始めた。

「唯も食べるか？ チョココロネあるけど」

「まあ……もらおうかな」

夏雄は唯にチョココロネを渡す。唯はゆっくりとパンを食べ始める。

「心臓に毛がある人ばかりで羨ましいよ」春人が皮肉を言う。

「食べれるときに食べるほうが賢いんだ」珍しく昌樹が夏雄達の肩を持った。

会話が止むと周りに聞き耳を立てる。静かだった。

「あんたら、サーフィン好きか？」

唐突に春人が訊いてきた。

「いや。俺はやらぬ」夏雄が答えた。唐突の暢気な言葉に戸惑う。先ほど皮肉を言ったばかりだというのに。何を言い出すのだろう。

「俺はサーフィンよりボディボードだな」広が言う。

「こいつ、サーファーなんだ。まあ、見た感じそれっぽいだろう？」勝也が春人を指さす。

「サーフィンはいいぜ！　ここ出たらまた海行くし。サーフィンやりたくなったら俺にいつてくれ。いいショップとか教えるから」

夏雄は頷いた。こんなときに話す内容ではないが、きつと彼なりの気遣いなのだろうと思うと自然と暖かい気持ち芽生える。サーフィンで思い出した。自分も海関連でやっていたものがあつた。

「俺、一回だけスキューバダイビングやったことあるな。中学生のときに親父に連れられてさ」

懐かしい思い出だ。タンクを背に付け、海中に潜つたのだ。海とこののは恐ろしいが、不思議で面白い。魚や軟体生物があんなにもいるなんて。

「ダイビングは専門外。でもあれも楽しそうだな。今やってもいいんじゃない？」

「金、結構かかるからさ」

「ああ……でもあれなら勝也みたいなデブでもできそうだな」

「うるせえよ」勝也が苦笑する。

「ダイビングって結構いいじゃん。ハワイとか沖縄の海とか潜りたいよ。すごい綺麗なんだってね……」奈美が目を輝かせる。

「そうだけ。ここ出たらやれよ。俺は海上。あんたは海中だ。夏の日差しの中の海は最高にテンション上がるって。海中だって明るいだろ」春人は夢想しているのか、実に楽しげな顔つきになっている。「わかった。じゃあこうしよう。ここをでたら俺はダイビングをや

る」夏雄が断言した。

「いいのかよ夏雄……気軽な約束しちゃってさ」広が言う。

夏雄はにやりとする。これも全てはここを出たらの話だ。無事にここを出られるのなら、そんな約束くらい大したことじゃないのだからか。ダイビングだって、サーフィンだってやってやるさ。ここを出られるのなら。

「そうかよ。なら俺もここ出たら海釣りに挑戦しよう」勝也が言った。「それで対等だな」

「そうか？」春人が苦笑した。

「俺はじゃあボディボードやる。ってもいつもしょっちゅうやってるんだけど」広がはしゃぎ出す。

「じゃああたしシユノーケルやるよ」唯も乗った。

「まあいいや。みんなそれぞれここを出たら約束、守れよ」春人は楽しそうに笑っていた。

「やってやるうじゃん。ここを出れたら、な」夏雄が返す。

沈黙の中、彼らは不思議と穏やかな気持ちで過ごした。

靴音が聞こえた。一同全員がそれを聞いたようで、一瞬にして気を引き締める。

廊下を窺う暇もなかった。彼らは油断していたのだろうか。部屋の前に紺のスーツを着た中年の男性が姿を表した。突き出た腹。禿げ掛かった頭部。脂ぎった、醜い顔。両の頬に傷を負っていて、そこが腫れてさらに醜いものになっている。狡猾でいて狂気を灯した目。にやりとした口元。右手にはアイスピックが握られていた。

「これはこれはお揃いで」低く、よく通る声で男はそう口にした。素早く、勝也が動いた。彼は近くにあった椅子を掴むと、勢いよく男に投げつけた。しかし、男はそれをうまくかわした。

「ずいぶんな挨拶じゃないか？」男は部屋の中に入ってきた。「せつかく入ってきたんだ。大人しく私達と一緒にになりなさい。同化するんだ。そのほうが、お互いのためになるぞ」

夏雄達は固まる。

これは誰だ？ 夏雄は混乱した頭の中でそう思った。これは誰で、何しに入ってきたか。勝也の対応からして、友好的な存在ではないようだし、それはその顔を見ればわかる。ぞっとするほど恐ろしい顔。今まで見た人間の中でこんなにおぞましく嫌らしい顔を拝んだことはない。狂った様子。これも亡霊の類なのだろうか。それにしては、あまりにも……。

「お前と一緒になんか御免だね」春人に勝也習って椅子を投げる。男の顔にうまく当たり、男はその場に倒れた。しかし、男は笑い出した！ そして起き上がった。

「逃げる！」勝也が叫び、全員廊下に出た。「あいつは駄目だ。あいつ、死んだ教師だ。なんでか知らないけど、他の霊よりずっとリアルで危険なんだ！」

夏雄は走りながら、これからどうなるんだろうと思った。唯はついてきているだろうか、振り返ると唯と昌樹と一緒に走っていた。

昌樹は昌樹なりに唯に気をつかっている。夏雄は、こいつも仲間ではあるんだなと思った。

任せてもいいだろう。

「唯と先にいって、安全そうな場所に！」夏雄は昌樹に叫び、昌樹は頷いて唯と走っていった。唯がちらりと夏雄の顔を見たが、何もいわずに駆けていった。

足を止めて、振り返る。覚悟を決めた。と、広も逃げていなかった。夏雄は広も一緒にここで戦う気なんだと思った。しかし、妙だった。なんだか呆けたような顔つきをして立ち止まる広は少々不気味だった。夏雄は心配になった。

「おいどうしたんだよ？」

広がゆっくりと夏雄の顔を見る。その顔は虚ろで、ぼんやりしていた。

「何してんだよこんなときに！ 逃げるか、戦うかだろうか」

「夏雄」広が咳くように言った。

「しっかししるって。ヒ口、お前のバット貸してくれないか？」

「何でだ？」

「貸してくれよ。頼むからさ。逃げてばかりだ。また散り散りになっても仕方ないだろ。広もさっき俺を逃がしただろ。俺だって役に立ちたい。それを貸してくれ。俺は残るから、唯を守ってやってくれよ」

「そいつは無理な話だな」

「何故？」

「俺が困るから」

夏雄が振り返ると、広がバットを大きく振りかざしていた。わけがわからずとも、体は動き、彼の攻撃をかわした。胸が熱い。かすったようだ。

「意外とすばしっこいじゃねえか」広が驚いた、というような芝居がかかった顔をした。

広の背後に男が迫っているが、男は広の背後で立ち止まった。

二人は仲間なんだと夏雄は理解した。

「もしかして気づいてたのかよ？」広がにやけた顔で訊いてきた。

夏雄はその広の表情で、これが本当の、本物の広であるわけがないと確信した。体は間違はなく広。だけど、中身は違う。全く別の存在だ。

「まさか。なんとなく、怜香に見逃されて黙ってるお前じゃないとは思ったけど」

「へえ。さすがだな夏雄」

「君もすぐに彼と同じようになるよ」広の背後にいる男がにっこりした。

バットがあればなんと夏雄は思った。どうにかして奪えないものだろうか。逃げることもできるかもしれないが、唯たちに危害が及ぶのは避けたかった。たとえ、どのみち全員が死ぬとしても。

夏雄の中で闘志が芽生えた。広は強い。だけど、負けるわけにはいかない。過去の記憶が巡る。振り払おうとしても、記憶が蘇る。高校時代からの付き合いだ。広とは互いに楽しくやっていた。今で



も仲のよい、親友。

「俺をやるのは簡単じゃないぞ、ヒロ」

広は笑った。「じゃ、お前からな。どのみちこれで他の連中もメチャクチャにしてやるけどよ」

広のバットが高く掲げられた。

昌樹と唯は化学実験室に逃げ込み、奥にある実験道具の置かれた小部屋に入った。左右にある棚にはエタノールの入った瓶、やビール、フラスコや硝酸ナトリウムが入った瓶などが保管されている。唯は奥の教師用の机の下に身を隠し、昌樹は棚と棚の間に隠れた。

二人とも息を殺して耳を澄まし、恐怖と戦いつつも外の状況を探ろうとしていた。唯は夏雄が心配だった。広と一緒ならいいのだが、夏雄一人では危険すぎる。広ほど体格に恵まれていない夏雄だ。木刀を持ったあの男に襲われたら……。果たしてここに隠れるのは最善なのだろうか？

時間が過ぎる。誰かが走る音が聞こえるが、誰なのかは定かではない。少し遠くで争う音が聞こえたような気がしたが、すぐに止んでしまった。

静かになった。

「大丈夫かな」唯は呟いた。

「わかるかよ」昌樹が答える。

「みんな無事だといいけど」

「そう祈るさ」

ゆっくりと時間は過ぎていく。二人とも、特に喋ることもなく廊下の様子に聞き耳を立てていた。

「ねえ、昌樹君はどうしてここにきたかったの？」唯が唐突に昌樹に質問した。

「俺がここにきた理由？」

「うん。昌樹君ってさ、何か訳ありだと思っただよね。唯の勘じゃこの学校にくる何かしらの理由があると思っただよ」

鋭いな。昌樹は笑いそうになった。見た目はちびで、特に深く考えていないような性格に見えるが、それでも二十歳の成人した女な

んだなと感心する。

こんな状況で話すべき内容だろうか。いや、いい。全てを話したい。今はそんな心境だった。きっとこれも運命なのだ。

「察しの通り、俺がここにきたのは理由がある。俺はここにきたかった……妹のために」

「妹さん？」唯はあくまで小声を出す。

「うん。もういないけど、俺の妹、名前は美幸。美しに幸ってかくんだけど、名前に反して幸は薄かったみたいだ」昌樹は苦笑したが、唯は黙っていた。

「妹は俺の二つ下で、俺に甘えてばかりの可愛い奴だった。少々鬱陶しいときもあったけど、今となっては全てが懐かしい思い出だ」

「亡くなった、の」

「うん。亡くなった……死んだんだ」

唯は重い昌樹の過去に、どう反応していいのかわからない様子だった。

「妹の死因は不明だった。突然この学校で倒れて、それから意識が戻らなかった。俺が十八のときだった。俺はわけがわからずに呆然とするばかりだった。あの頃の俺は……いや、いい。とにかく俺は妹の死に納得がいかなかった。病気でなくなるなんてありえない。妹は健康そのものだった。事故だったらまだわかるよ。階段から転げ落ちたとかね。だけど、全く不明の突然死。納得いかないまま、この学校は廃校になった。俺は二重に納得がいかなかった。何かある。この学校には、何か得体のしれないものがあるに違いないとね。心霊なんて信じていないけど、それでも俺は気になった。だから、君たちが計画するツアーに飛びついた」

今でも思い出す。妹の笑顔。あんなに、屈託のない笑顔を自分に向けていたのに、いつも冷たい態度を取っていた。妹は自分を慕っていた。だけど、面倒くさいときにもちよっかいをかけてくるのに少しうんざりしていた。その頃は受験も控えていたし、苛立っていた。その間妹とは距離を取っていたように思う。たまにジューズを

運んでくるのは有り難かった。馬鹿なりに頑張れ、という応援も励みにはなつた。

妹が死んだとき、昌樹は嘘だと思った。嘘に口にするのも考えるのも馬鹿らしいほど現実のことではないと思った。

両親が亡きわめき、葬儀の話をしているときも、昌樹はゲームをして気分を紛らわした。こんなときにと父親にゲーム機を半壊されても、まだ信じていなかった。誰かがからかっている、と思った。あるいは何か別次元の世界に自分が入ったのではないかという気持ちでいっぱいだった。妹がいない別の世界に。きつと少し、ほんの少しだけ時が経てば正常の世界に戻るだろうと思った。

葬儀が始まった。妹が棺に入っている。妹はいつもと変わらないように見える。目は閉じているし、口は動かない。そのときに昌樹は、おかしいことに気づいた。これはおかしい。これは普通じゃない。

妹は死んでいる。その目が開くことはない。

妹は……もう動かない。死んでるから。シンデヒツギノナカニヨコタワツテイルカラ。

火葬をするという段階になって、昌樹の中で何かが崩れていった。そして、知らぬうちに焼香台を蹴り飛ばし、供えられた花を床に倒し、怒号を上げて外に飛び出していた。止めに入った親戚を殴つたようだが、今も記憶にない。

外に出て昌樹は号泣し、妹の火葬が終わるまで、いや、世界が終わるまでこの場所から動くもんかと思った。父親がきた。殴られた。そして、抱擁。母親もきて泣いている。二人の泣き声。昌樹は空を見上げながら、いつまでも終わらぬ涙を流していた。妹の顔は絶えず浮かぶが、もう美幸はこの世界にいない、今頃焼かれて骨になっているのだ。

骨に。

辺りが真っ暗になり、昌樹は気絶した。それからは相変わらずの日々だったが、妹が、美幸がいなかった。ただ、それだけが違って

いた。全てが真っ白に見えた。

「妹は何が理由で死んでしまったんだろう。それが俺がここにきた理由だ」

見ると、唯は涙を流していた。昌樹は驚いて唯を見た。

驚いていた。他人の話なのに。こんなにも共感してくれるとは。妹の話を他人にするのは初めてだが、こうして涙を流して同情をしてくれる者もいるらしい。今まで他人なんて……と思っていたが、普通の人間は案外温かいのかもしれない。これまであまり仲間を作ったりなど、人との絆を構築してきた人生だったとはいえない。どこか、孤独だった。だが、こうして自分の話に耳を傾け、何かを思ってくれる者が側にいるというのは、とても嬉しいものなのかもしれない。そう考えると昌樹は少し目を潤ませた。

「悲しい話だね。そうか、河西美幸。そうだ、亡くなった生徒に、確か名前があつたよ。そうか。そうだったんだ」

「ああ。俺はこの学校で美幸が死んだのは、廃校になる原因の一つだと思ってる。他の生徒と同じように」

「きつとそうだ……今起きてるこの現象、これが絶対に妹さんが亡くなったことに関わっていることは、間違いないと思うな」

昌樹はうなずく。そうだ、間違いない。妹が死んだ原因。それが今起きている現象に関連している。妹は霊に殺されたのだろうか？

だが……。

「一つだけ」

「え」

「妹が死ぬ少し前に言ってたんだ。それを思い出したのはごく最近のことなんだけど。自分はもうすぐ殺されるかもしれないって」

「何それ……」

「いじめにでもあつてるのかって俺は言った。軽い気持ちだった。

何かの冗談だと思っただ。そしたら、いじめじゃない。クラスの子に殺されるかもしれないって。俺は気になった。それで調べたら、この学校には妹が死ぬ数ヶ月前に女生徒が転校しているということ

がわかった。名前は蒼井柑<sup>あおいかな</sup>。そいつが転校してからおかしなことが  
起こっている。それで俺はこの転校生が怪しいと睨んだんだ。だ  
けどそいつも死んでるんだ」

不気味な沈黙が続いた。唯は周囲に耳を澄ますが、静かだった。静かすぎるほどに。夏雄は逃げおおせただろうか。一人だけ格好つけて残っても、あんないかれた男が相手では危険すぎる。広がっているのなら心強いのだが。

智志。智志は何をしているのだろう。智志がいなければ、何をやっても上手くいくわけがないのに。その智志がいきなり倒れてしまつて、無事なのかどうかすらわからない。

唯は再び涙を浮かべたが、すぐにぬぐつた。

「その転校生も死んだ生徒の一人つてこと？」

「そう。妙だと思つた。その転校生が全ての元凶なら、死んでいるというのはおかしい」

「ううん、わからないけど、唯はその転校生が全ての元凶だと思う。それで、なんでだか知らないけど自分も死んじゃったんだよ」唯は召喚という言葉を思い出した。智志が言っていたことだ。黒魔術の儀式。聞いた話では、だいぶ不気味なものようだ。

「で、問題はその転校生は何者なのか、だね」

「わからない。けど、数人を死に追い込み、教師を狂わせている。普通の人間だとは思えない」

徘徊音が聞こえて、二人は押し黙つた。わからないが、嫌な予感がした。

「唯？」

夏雄の声！ 唯は立ち上がった。しかし、昌樹に手を捕まれた。

「離して。夏雄だよ」

昌樹は首を振る。「なんかおかしい」

「唯！ どこだ！ もうかくれんぼは終わりだ」夏雄の声。

唯は血の気が引いた。そして、崩れるようにその場に倒れ込んだ。「大丈夫か？」昌樹が小声で声をかける。

唯は首を振った。「おかしいね。あれ、なんだか変だよ。夏雄っぽい感じがしない」声に抑揚がなさすぎる。親しい仲ではない昌樹でもわかるのだ。長年一緒の自分ならすぐに気づくべきだった。下手くそな役者はどこかへいけ。唯はそう願った。やがて、足音は遠くへいってしまった。

くすくすくす。

笑い声がした。女の笑い声。

二人はその場に硬直した。

笑い声は廊下から聞こえてきた。それからだんだん大きくなり、急に途絶えた。

もういやだ。帰りたい。ここから出たい。唯は思った。



一人逃げた怜香は満希を心配する余裕もなく一年A組の教室にいた。彼女は教壇の下に隠れて身を震わせていた。あれは逃げるしかなかった。あれは幽霊だろうか。だけど、あんなにはつきりとした形を取る幽霊なんてあっていいのだろうか。

智志がいればと怜香は思う。智志さえいれば、あんな霊なんて追いかけてくれるに違いないのに。

初めて心霊ツアーに参加したときのことだ。そんなものに興味はなかったが、同じ大学の唯に熱心に誘われたので、仕方なく参加することにした。彼女は夏雄と広と最初から気さくに喋っていた。夏雄は同じ大学らしいが、怜香は全然面識がなかった。満希はなんとなく、退屈そうにしていた。もともと誘ったのは怜香からだった。

満希は高校からの友人だった。大人しい怜香と満希がどうして友人になったかという、単なる部活仲間というだけだ。それはどうでもいい。満希を誘ったのはいいものの、心霊ツアーはやっぱり嫌だった。人一倍恐がりなのだから。唯の強い勧誘なんてはねつければよかった。

廃病院の前にやってくる。見るだけで手足が震えた。廃病院はビルの中に囲まれているものの、その一つが独立したオーラを纏っているようで、怜香はその中に入っていくというのが、すでに何かに挑戦を仕掛けている行為なのではないかという思いにとりつかれた。結局幽霊は見なかった。満希は見たらしいが、怜香は安堵していた。廃病院の中を見るだけで、霊現象など必要がないほど怜香にとって息が詰まるほど恐ろしい場所だった。もうとっくに廃屋なのに、かしこに病院独特の匂いがする。その匂いは嫌いではないが、まだ病院が病院として存在しているかのような錯覚を覚える。散乱した医療器具などを想像したが、ほとんど何もなかった。どの部屋も荒れに荒れており、乱雑な床には若者たちの性行為を匂わせる道具が

乱雑に置いてあった。この廃屋はすでに地元の者たちの格好の溜まり場になっているのだろう。幾分恐怖はうすらいだ。だが、その代わりに寂しい気持ちになる。かつては病院だったのに、今はわけのわからない連中によって性行為の格好の場所になっている。もし、病院に地縛霊のようなものがあるとしたら、彼らを排除しようとするのではないだろうか。それは、必然の行為だ。侵略者に対して報復措置をとるのはもっともなことだ。

怜香は霊を見たことがある。中学一年の頃だ。真夜中の電話。掛かってくると、すぐに切れたり、殺してやるという言葉が入ったりする。電話が鳴るときは決まって怜香しか家にいないときだ。

部屋の外から窓を見ると、男が見える。にやにやと笑みを浮かべた同い年くらいの男が、じっとこちらを見ているのだ。カーテン越しに見えるはずもないのに、男はこちらをじっと見つめ、そして消える。一瞬で。二階に浮いている男で、消える。霊以外に何だというのだろうか。

彼は時たま、怜香の前に姿を現し、怜香を驚かす。男は怜香が怯えるのが楽しくて仕方がないように見えた。

一度男の霊は怜香をひっぱいた。現実的な痛みにも、怜香はたじろいだ。それで怜香はついに心が折れてしまった。霊は直接的にこちらに何かできるわけではない、という根拠があるのかわからない持論にすがっていたのだが、それが脆くも崩れ去った。霊はこちらの視界に入る以上の干渉ができるのだ。恐るべき事実だった。

それから男の霊は姿を見せなくなつたが、怜香はますます大人しい性格となり、病的な様子に友人達も彼女から離れていった。

男の霊以外にも彼女はたまに霊を見るようになった。彼女はなるべく彼らと目を合わせない。見える者と思われなくなつたからだ。彼らは見るも見えないも関係ないようだ。目があつても、虚ろな様子で、認識しているようには思えない。だが何か敵意のようなものは感じる。こちらに対して、憎悪のようなものを感じるときがある。それ以上のことは起きないが、霊を見るたびに彼女は寿命を

縮める思いだった。

廃病院から出ると智志に肩を叩かれた。

「お疲れ。君はずいぶん霊感が強いようだけど、何か見えたかい？ 満希って子も霊感が強いようだから見てしまったようだけど、君は少し特別だな。霊に干渉できる強さを持っている。夏雄もそうだが君は別格だ。これって凄いことだよ」

怜香には智志が何をいつているのかわからない。あまり男と接したことがなかったから、肩を叩かれただけでどぎまぎしてしまう。

「結構霊には苦労してきたんじゃないか？ でも大丈夫。君と俺が出会えたのは運命だよ。俺を信じろよ。君を変えてあげる」

怜香は自分は愛の告白を受けているのだろうかと勘違いした。智志の目があまりにも輝いていたから、白く透き通った頬をうっすらと赤くした。

それから怜香は智志を師と仰ぐようになる。

時間は経過する。恐怖感が徐々に薄れていく。少しずつだが落ち着きを取り戻す。辺りに物音がしないなど判断すると怜香は教壇からのそのそと顔を出し立ち上がった。

教室は静まりかえっていて、綺麗に並べられている机の列を見ると哀しい気分になる。こんなのであんまりだ。今にも授業を続けられるのに、もう授業を始める教師も机に座ってノートを取ったり居眠りをする生徒もいない。ここには何がある？ ただの廃屋だ。一人でいたら、この静寂の中に取り込まれてしまいそうだ。

おかしくなりそうだ。こんなところに一人でなんていられない。怜香は教室を出ようとする。しかし、何かを見つけた。窓際の机の上に何かが置いてあった。怜香は移動し、その物体を間近で観察した。それはセーラー服だった。血がこびりついた、不気味なセーラー服。怜香は触るのをためらった。しかし、なぜこんなところに血のついたセーラー服が置いてあるのか、疑問に思いつつ触れてみた。電気が走ったような感覚がし、それから彼女は軽く悲鳴を上げた。

何かを見ている。廊下。この学校なのか。だが、生徒たちが大勢で賑わっている。その中に、一人だけ異質な少女の姿。何だろう？少女の周りに、黒いオーラが漂っているような気がするのだが。怜香はそれに近付いていく。怜香の意志ではない。勝手に動くのだ。よくよく考えてみると自分の背丈ではない。まるで他の人間の目になったような気分。実際、今歩いているのは怜香ではない。髪の毛の長さも全然違うし、亜麻色だ。

「蒼井さん、今日は放課後一緒に掃除なんだけど、手伝ってくれる？」

蒼井と呼ばれた少女は怜香のほうを一瞥するが、何もいわずに顔をそらす。

「お願い。一緒に掃除しないと、私、部活に間に合わないの。コーチが厳しいの」

蒼井と呼ばれた相手は立ち上がる。その少女は美人だった。だが周りに立ちこめる黒いオーラは何なのだろう。

「あんだ、私に逆らうの？」

「そんなこと……」

「あんだ、いつも私のことじろじろ見てるよね。もしかして、気づいているのかな」

「何のこと？」

「とぼけんな。今のあたしは普通じゃないんだ。わかるんだよ」蒼井は右手で相手の、怜香の両頬を掴んだ。「靈感あんだろ。うん？」

蒼井に睨みつけられる。そして、蒼井はにっこりと笑った。途端に怜香は息ができなくなった。

「や、やめて」

「今の私は催眠以上のことができるんだ。転校したときと同じとは思っなよ」

怜香は息ができるようになるとすぐに肺に酸素を送った。

「まあいいや。他言無用でお願いね。じゃないと、今度は殺すから」

脅しをかけると蒼井と呼ばれた女生徒は去っていく。

世界が暗転する。そして、再び意識を取り戻した。怜香はセーラー服をしっかりと握っていた。周りに生徒など、誰もいない。

少しずつ理解し始める。今は、この学校の過去の記憶なのではないだろうか。もしかすると、このセーラー服を着た少女の記憶なのかもしれない。あの蒼井と呼ばれた女生徒は何者なのかわからないが。超能力者なのだろうか。睨まれただけで息が苦しくなった。あんなことができるなんて。

超能力者がこの学校にいた。だが、それがどうしたというのだろう。仮に今のがこの学校の、あるいはセーラー服の持ち主の記憶の残滓だとしても、あんな過去を見せられても怜香には何をしていいかわからない。確かに凄いことなのかもしれないが、今となっては心霊現象よりもここから出ることにしか考えられない。

満希を探すか。もう一人の、美紅という女も。あの女、最初にナイフを持っていたのが引つかかる。なぜあんなものを？ 自分も気づいたときにはナイフを握りしめていた。一体、何だというのだろう。

とにかく二人だ。探しているうちに唯たちと会えるかもしれない。廊下に出ると、足がすくんだ。息を大きく吸い、吐く。そして怜香は忍び足で移動を開始した。

満希と悠子は一緒に二階を歩いていった。満希は悠子と一緒によりも、怜香が一緒だったらよかつたなと思った。悠子はなんだかこんな状況なのにどこか余裕があるようにも見えて、それが気に入らない。

「誰も見つからないなあ」

「ねえ悠子。向こうの棟にいつてみない？　なんかここは誰もいないっぽいし」

「そうしょっか」

悠子と満希は特別棟へと続く渡り廊下を歩いた。学校の外は普通の景色だ。きつと外では日常的な世界があるのだろう。そして満希はその世界に行きたいのに、この廃校から出られないでいる。

「なんだか寂しいよね」悠子が言った。彼女は常に先頭を歩いている。怖くはないのか、歩調が緩まることはなく、満希が彼女の後を追う形となった。

「さっさとここから出たいよ」

「そうだね。ここは寂しすぎるもの。もう少し、人がいないとね」

「唯たちがこっちにいればいいけど」

「唯は小さいから見つけづらいんだよねえ」悠子が笑った。

「唯が聞いたら怒りそう」

渡り廊下を渡りきる。満希は誰かが壁を背にして倒れていることに気づき、走りだした。それは広だった。

「ヒロ！　ヒロ！」満希は広に駆け寄った。

激しい戦いの中で、深い後悔が体の内側から湧いてきたが、彼にはそれがよくわからなかった。なぜだろう、この男を殺すのは絶対に駄目な気がする。背後にいる仲間はやってしまえ、と命令するといふのに。

頭が痛かった。何だろう、目の前の相手と、結構一緒に遊んだ記

憶がある。学校生活でも、そうだ。一緒に屋上でよく飯を食べたっけ。カラオケも、買い物も一緒だった。気持ち悪いほど仲がよかった気がする。

今でもそうだ。一緒にここまできたり、高校のときと変わらずに休日共に遊ぶ。海にも旅行にも共にいったじゃないか。

友達だ。一番の親友。なのに、なぜそんな相手を自分はバットで傷つけているのだろう。もうその友達は血だらけじゃないか。

バットを落とした。背後の仲間、と思われる者が怒声をあげるが、何も聞こえない。もういい。広はその場で気絶した。

「起きろ、広」

声がした。懐かしい声……この声は。

「起きろ。もう大丈夫だ。お前にかかっている呪縛は解けたはず。ゆっくりしてる場合じゃない。もう起きて、仲間を救え。俺は別の用がある」

智志？

広がゆっくりと目を開けた。目の前には見知った仲間がいた。

「ああ……満希か。どうしたんだよ」

「こっちの台詞！ 何してるの、他のみんなはどこにいるの？」

広は自分の横に置いてあるバットを拾うと起き上がり、眠たげなような、ぼんやりした顔で周囲を見回した。

「俺……どうしたんだっけ」

「あんだ、大丈夫？」

「いや、よくわかんねえ」

広は額を押さえる。頭痛がする。他は大丈夫そうだ。だが頭が痛い。満希が心配そうにこちらを見つめていることに気づく。

「満希、俺は大丈夫みたいだけど、他の奴らが心配だ。さっきまでみんなと一緒にいたような気がする。そう遠くには行ってないと思う」

広は悠子の存在に気付いた。

「お二人はどこにいたんだよ？」

「みんなを探してたの。さあ、夏雄や唯を探しに行こう」

ああ、と広は先頭に立たされた。悠子ねえ。何でだろう。もやもやする。どうも頭が痛い。誰かに殴られたかのような痛みだ。記憶はないが、誰かに殴られた気がする。確信ではないが、夏雄に殴られたような。

胸騒ぎがする。何だろう。とてつもなく気分が悪い。吐きそうだ。

夏雄はどこだ？

広が歩を早める。満希たちも足並みを揃えてスピードを速めた。

「夏雄！ どこだよ、畜生！」

現れたのは夏雄ではなく、上半身血まみれの女生徒だった。セーラー服は切り裂かれ、血が滴っている。

「どけよ！」

広は霊に近付き、手で振り払った。実体はなかった。血まみれの少女は消えた。そして広は悲鳴を上げてその場に倒れ込んだ。脳内にイメージが浮かんできた。

学校の教室だ。画面が薄暗く、鮮明ではなくぼやけている。初期のカラーテレビのようだ。生徒たちが賑わっている。たわいもないお喋り。広は懐かしく感じた。そういえば高校の頃はこんな感じだった。夏雄やらとたわいもない会話に華を咲かせていた。

これは……この学校の過去なのだろうかと広は考えてみた。廊下側が見れたが、色々そっくりだ。広は自分自身が動けないということに気づいた。まるで夢の中みたいだ。

セーラー服の女生徒達の中に、一人だけ異質な雰囲気を持つ、豊かな黒髪をもつ者がいた。その女生徒は一人の、髪の毛の短い気弱そうな女生徒に近付いていく。その女生徒が通ると他の生徒がまるでライオンでも見るかのように離れた。広は動かなかった。視線が自分の意志とは関係なく、下がる。そして、自分がセーラー服を着てい



ることに気づいて困惑する。

「蒼井さん、こいつですよね」広は自分が口を動かすのを感じたが、声は女の声だった。

「蒼井さん、おはよう」気弱そうな女が脅えた目をしつとも近付いてくる女生徒に挨拶した。

蒼井。誰かに似てる。

「あなた、死んでくれないかな？」蒼井と呼ばれた女性が言う。  
「え？」

気弱な女は困惑しているようだ。

「生け贄に捧げるの。生け贄に捧げないと、みんな死ぬから。ほら、あたしの能力だってそうじゃん？ 神の力を得たんだから、交換条件が必要なわけ」

広には会話の内容がさっぱりわからない。

生け贄？

「この学校は呪われてる。わかるでしょ？ こんなにも霊に支配された場所もないもの。大丈夫。あなたが死ぬことによって呪いは解ける。そうすれば、みんなの不安も解消されるはずだよ」

蒼井。蒼井か。広は彼女のことを知っている。転校生の蒼井柑奈。超能力が使えるとあって、他の生徒達を操ったという。しかし、彼女は超能力者ではなく、催眠術師だという説が濃厚だ。催眠術で他の連中に霊能力めいた力があるということを確認させ、他の生徒達を自分のいいなりにさせる。そして、彼女はエスカレートする。この学校は呪われていると黒魔術の儀式で呪いを解除しようとする。その過程で彼女は本物の力を得たらしい。それでますます彼女は恐ろしい存在となる。だが、儀式の途中で彼女は死ぬ。狂った生徒たちによって惨殺される。その生徒たちのほとんどが発狂してしまう。この学校が廃校になってしまった決定的な原因。つまり、原因は転校生である蒼井柑奈なのだろうか。

女生徒は困った顔をし、それから逃げるように走り去っていく。美しい女生徒だった。蒼井は嫉妬の眼差しを彼女に向けていた。

それはその女生徒が清楚で汚れない、本当に美人だから。

「ほら、いくよ」蒼井が言い、広は勝手に体を動かした。

それから、再び暗転。

「広？」満希が広に声をかけた。

広は満希を振り返った。

「ああ。大丈夫だ　満希、鍵は持ってないか？」

「鍵？」

「ここから出るためには鍵が必要なんだよ」

「持っていないよ」

「だろうな」

誰かが持っていれば、すぐにでもここから脱出できる。もちろん、全員が合流してからの話だが。

だんだんと記憶が戻ってくる。春人たちは無事だろうか。あの連中がいれば心強いのだが。

外は雨が降ってきた。これから強くなりそうだ。天気予報では確かに荒れる、といってな。

とにかく、仲間を捜そう。

静かになったところ、唯と昌樹は隠れるのをやめ、廊下に出てみた。廊下は静かで、誰の気配もない。

「大丈夫そうだね？」唯が訊く。

「ああ。たぶんね」

昌樹は答えたが、本当に大丈夫かどうかなんてわかるはずもなかった。なんせ、この校舎はそれ自体がお化け屋敷のようなものだ。今こうして無事にいるが、もしかしたら全とお見通しなのかもしれない。この校舎に巣くう悪霊に、弄ばれている。気に入らなかつた。どこへいくあてもなく静かに移動していると、すぐに血まみれの男子生徒の存在に気づいた。焦点の定まらない目をして、口を開けて歩く様はまるでゾンビのようだ。

昌樹が唯をかばうようにしてゾンビの前に立った。そして昌樹は殴り掛かった。手応えはなかったが、昌樹は頭に強い衝撃を感じた。昌樹は倒れた。

高校生が複数、薄暗い教室にいる。辺りは静かだった。女生徒が男子教師に何かをしている。その光景はどこかエロティックに見える。男子教師はまるで犬のように彼女の言葉にうなずいている。恍惚の表情だった。

「あんたが殺すの。園子をね。いたずらしてもいいの。したかったんでしょ。前から園子にちょっかい出してるのは知ってたよ、この豚野郎。思う存分したい放題していい。だけど、楽しんだ後はちゃんと殺すこと、いいね」

他の生徒たちは神秘的な顔でそのやりとりを見守っている。みな、顔がひきつっていた。

「あの女は悪魔なんだな」教師の顔つきは歪んでいた。「悪魔には、何をしても許されるんだ」

「この学校は呪われている。それは確かだと思う。呪いを解くためには生け贄が絶対不可欠なんだから。あいつの血と引き替えに、この学校は平和になる。本当に」

狂ってる。しかし、学校全体から感じられるこの閉塞感は何なのだろう。巨大な何か全てを覆っているような……。

ゾンビはいなくなっていて、昌樹は今の光景がよくわからない。わけがわからずとも起き上がる。唯が心配そうな顔をしている。

「大丈夫。何でもない。頭の中で何かイメージが広がったんだ。もしかすると……今の霊の過去の記憶なのかも」

唯に話してみた。

「学校が呪われてる、か。智志ならわかるはずだよ」

「智志が、かい。君らは随分リーダーを信用してるようだね」

「智志はね、絶対に何か確信があつてここを選んてる。たぶん、詳しい事情は誰よりもわかつてると思う。それにね、智志は」  
「唯！」

唯は声の方向に振り返る。唯の視線の先には広たちが立っていた。そして満希、悠子がいる。唯と昌樹は互いに顔を見合わせて微笑んだ。しかし唯はすぐに笑みを引っ込める。

「広たち、無事でよかったけど……夏雄は？」

「広が苦い顔をした。その顔を見て唯の顔が強ばる。」

「いや、わからないんだ。俺も意識がなくて。気づいたら誰もいなくて」広はしどろもどろになった。

「そっか。わかったよ。早く他のみんなを捜そう」

「ああ、満希ちゃんたち！」

満希はぎよつとした顔をする。大きな声を出す女。それは美紅だった。

「見つけたあ！ さっきはさんざんだったね……ずいぶんお仲間が増えたみたいじゃん」

「誰？」 広が満希に聞く。

「あたしたちと同じ。ここにきちゃった人」

「ああ、春人たちの仲間か」

「春人知ってるの、どこ！」 美紅は広に詰め寄った。

「いや、俺もわからない。途中ではぐれたんだ。一緒に探そう」

「鍵も仲間も見つけないといけない。結構難易度高いな」 昌樹が呟いた。

「鍵ってこれ？」 美紅がスカートのポケットから鍵を取り出した。

「それ……どこに？」 昌樹は息を飲んだ。

「一階の食堂にあつたよ。ゴミバケツに入ってた。食事をあさろうとしたんだけどね、何もなかったんだ。よかつたらあげるよ」

昌樹は鍵を手にした。これが一階の玄関の鍵なら、今すぐにでもここからでれるはずだった。

「試してみる価値はあるな。場所がヒントと一致するし」 広が言った。「一階にいこうぜ。また渡り廊下を渡ってな」

歩いていると、広は徐々に思い出してきた。彼の体の震えに気づいた者は昌樹だけだった。夏雄はすでに……。広はそのことを心の奥にしまった。だが唯たちにはどう説明すればいいだろうのと、彼は一人苦悩した。

満希は智志の出現を期待していた。広たちのいうように美紅が持っていた鍵で玄関を開けられるのなら、こんなところから一刻も早く出たい。だけど、怜香と夏雄もいない。それに智志がいない。

智志と会ったのは二年前。短大生活に退屈していたときだ。友人の怜香から電話があった。心霊ツアーに参加したいのだが、他の人たちとは初対面なので緊張する。一緒にきてほしいという誘いだっただ。心霊ツアーなんて全く興味がない。怖いのは苦手だ。お化けトンネルなんかは付き合っていた彼氏と友人と行ったことがあるが、何もなかった。くだらないものだ。

だけど怜香の必死の懇願に満希も折れた。智志は主催者。広と夏雄は高校からの友人。唯は智志と同じ高校で、怜香と唯が同じ学校で知り合い、そして智志に紹介された。夏雄はネットで智志のブログを見て興味を抱き、広を誘ったというわけだ。

最初の廃病院巡りで満希は幽霊を見た。怜香と一緒に悲鳴を上げた。恐ろしい目つきで睨みつけてくる、生きていない存在。

その恐怖で満希は昔のことを思い出した。九歳の頃、母親が自殺した。理由は父親の浮気だった。それから数日後、学校から帰宅すると母親が居間から現れ、首を絞められた。母親は死んでいたが、力は強く、その顔は憎しみを体現していた。

妹が帰ると母親は消え、以来母親の霊に悩まされたことはない。

過去の恐怖と哀しみと不条理を思い出し、彼女は泣き崩れた。智志が優しく肩をなでてくれた。

「大丈夫。みんな辛いんだ。この世には常識では計り知れない世界があるんだ。それにみんな言いようのない恐怖を覚える。だけど、俺はそんな人たちを守るためにいる。俺を信じてくれ。過去なんて忘れちまえ。その記憶が君を悩ますことはもうないから」

智志に母親のことを言っただけではないのに、智志は理解を示し

た。それが満希の救いとなった。

以来智志は満希の心の師匠となった。表には出さずとも智志のことを特別視し、恋愛感情とはまた違う感情を智志に抱いていた。

その智志を失うというのは、心の支えを失うということだった。

そんなのはごめんだった。智志は満希にとってこの世の光だ。

救いだなければ。

「もういいの？」小声で、唯が昌樹に聞いた。

「え？」

「このまま出ても、何の解決にもならない」

妹のことか。目的がまだ果たしていないというのだな。昌樹は唯の目にたじろいだ。さっきまで怯えただけの子羊のような彼女の目ではない。真剣で、強い眼差し。

「許せないんだ。妹さんもだけど、学校を……普通に勉強したり、恋したり、スポーツしたり不良したりするようになったところを、青春を満喫している場所をぶちこわすやつって」

唯の雰囲気なんとなく変化したのに昌樹は気付いた。威圧感のようなもの。これは何だろう？ 彼女も普通の人間ではないのか。

「わかるけど、相手は凄すぎる。俺は霊も超常現象も信じないけど、それら全てを見せつけられた。危険すぎるよ。俺たちは火に飛び込んだ虫けらだ」

「でも、逃げたら結局闇の中だよ」

「ただどうすればいい？ 相手はあまりにも強大。こちらは巨鯨に飲み込まれたピノキオのようなものじゃないか。」

鍵を握りしめる。夏雄達を助ける必要があるから、逃げるわけじゃない。鍵穴が合うか試すだけだ。しかし、それで開いたら……外に出る以外の選択肢が浮かぶだろうか？ 手汗がにじむ。

渡り廊下を渡りきり、一同は階段を降り、一階に出た。もう少しで玄関まで出る。「ねえ、鍵穴が合わなかったら駄目なんですよ？」

これで外れだったらごめんね」美紅が謝る。

「別に、仕方ないでしょ」満希は言った。深く考えたくない。鍵穴は合う。そうでなければ、いよいよおしまいだ。

玄関に出ようとすると、生徒会役員室の扉がゆっくりと開き、先刻も現れたスーツを着た中年男性が現れた。醜悪な男。その手にはアイスピックではなく包丁が握られていた。

「家庭科室の調理具の切れ味はどうか。どうだ、よく切れそうだろうか？」男は下卑た笑い声を出した。

広はバットを構えた。

「こいつ、ここで異常な行為をした教師なんだな」昌樹が言う。「そっぴや過去の新聞にも載ってた」

「女生徒を鈍器で殴り殺した奴だね」唯が呟く。

「広、やっちゃって！」満希が言う。

広はおう、と叫び、バットを剣道の上段の構えのように掲げた。

こいつのせいで夏雄が……。広は容赦するつもりはなかった。どうせ霊なんだ。一撃で浄化させてやる。

背後から悲鳴。広が教師に注意しつつちらりと振り返った。髪の毛長い女がいる。白いワンピースが死に装束に見える女は、今まで見てきた中でもっとも霊らしい霊だった。

そちらに気を取られるわけにはいかない。

教師が包丁を振るって襲いかかる。広は教師の腕を強打し、包丁を落とさせた。腹に蹴りを見舞う。

「君はいい仲間になれると思ったんだがね」教師が倒れた。

また起き上がってくるだろう。なんせ霊なのだ。どうやってこいつを倒せるのだろうか。

広は油断した。教師に足を捕まれたのだ。教師の手には再び包丁が握られていて、広の足に包丁が刺さった。

一階で悲鳴を聞いた怜香は急いで階段を下りようとした。その途中で、血まみれの女生徒に遭遇した。怜香は悲鳴を上げる。その女



生徒の顔は先ほど過去の記憶で見た蒼井という女生徒とよく似ていた。片目が潰されていて、そこから血を流しているが、おそらくそうだ。

「この学校は呪われているの。あたしが正してやるの」

そう彼女は言った。そして、彼女が襲いかかってきた。腕が怜香の肩をつかんだ。

まただ！ 強いイメージが浮かび上がってくる。

大きな影が、蒼井を追っている。

「立ち去れ、邪悪な者よ！」彼女は叫びながら逃げるが、影は彼女を捉える。

生徒達が、狂気に駆られて生徒達が彼女を襲撃する。後は滅茶苦茶だった。地獄絵図のような光景は、新聞には載らなかった。

「助けてえ！」

蒼井は惨殺された。

それから、暗闇が全てを覆った。

怜香は記憶の世界から抜け出した。蒼井柑奈が不気味な笑みで、よろよろとした歩きで怜香に迫ってくる。

「消えなさい」怜香が言った。すると、亡霊はかき消えた。

彼女も殺されたようだ……何かに。あの影の正体は何なのだろう。

「あれは呪いの根源だ」

声がした。

智志だった。智志が目の前にいた。

横腹に包帯をした智志は、苦しそうな顔をしていた。

「智志……なんで、それ、え、なんで」怜香は智志に走りよってうるたえた。

「俺は大丈夫、心配するな。それより他の連中が心配だ……俺も自分なりにここの情報を探してみたよ。ここは呪われている。蒼井柑奈は不吉な事件が起こったこの場所を選んで、自分を本当の魔術師

にしようと思案した狂った女だった。前の学校でも催眠術を利用してくだらないことをしていたらしい。それが露見して、そこに居づらくなつたんだらうな。そして転校した。黒魔術は能力を得るにはいい手だったが、彼女が契約した存在が悪すぎた。邪神のようなものだ。彼女のような催眠術が取り柄の無能力者には手に負えなかった。初めのうちはその力の一部を取り入れ、悦に浸つて学園の女王気取りだった。しかし儀式を完成させてしまうと悪霊は完璧な力を手に入れた。用済みになつた蒼井は殺されて養分にされた。それから悪霊はこの学校を支配し、崩壊させた。そして今でも噂を聞いてやってくる者たちを食らつて生きながらえている。俺たちもだ。俺も迂闊過ぎた。相手がこんなにもすごい存在とは思わなかった」

「智志のいつていることがよくわからないよ」

「悪霊だ。大悪霊がこの学校に渦巻いている。さ、行こう。みんなが待つてる」

怜香はわけがわからなかったが、智志が無事でよかつたと思つた。二人は走り、一階に向かった。

広は苦戦していた。バットでいくら殴りつけても教師は何度でも起き上がってくる。その容姿が強打によって変貌しても、すぐに元に戻ってしまう。

こいつは無理だと広は思った。倒すのは不可能。相手は化け物なんだ。推測だが、この学校によって亡霊は異様な力を得ている。実体化し、相手を攻撃することができる。そういうことができる存在がいる。

智志がいればと広は舌打ちする。こんな悪霊程度に。

「催眠術で人を殺したなんて許されると思ってるのか？」広は相手の隙を作ろうと言った。

「私は被害者なのだよ。そして今はあのお方の奴隷だ」

狂った笑みを浮かべて包丁を突いてくる。広は足を痛めているが、気合いで頑張っている。回避することはできないので、バットを振るって相手を近寄せさせないのが精一杯だ。背後では唯たちが必死に戦っているようだ。

昌樹は広をフォローしたかったが、武器を持った二人の間に割って入ることは無理だと判断し、唯たちでは手におえそうにない汚れたワンピースの亡霊を相手にしていた。相手は得体のしれないオーラを醸し出していて、昌樹や唯たちの全身は震えていた。

唯は全身が動けなかった。相手はものすごいプレッシャーをかけてきている。顔は長い髪で見えないが、一体彼女は何だというのだろう。セーラー服を着ているこの学校の生徒ではないようだし、普通の霊とは違って負のオーラが圧倒的すぎる。悪霊の中の悪霊という雰囲気、威圧間に圧倒される。

亡霊の手が肩にかかり、唯はそのあまりの冷たさに腰を抜かしてその場にへたりこんだ。

「唯！」満希が叫ぶ。隣で美紅がしどろもどろになっている。

亡霊が唯に再び手をかけようとする。しかし亡霊は唐突に動けなくなった。

「お前ら！」昌樹が声を出した。

勝也、そして美菜がいた。勝也が亡霊を後ろから羽交い締めになっている。

「鍵を見つけたの？」美菜が叫ぶ。

「ああ！」昌樹は鍵を見せた。

「なら早くそれで玄関開けて！」

昌樹はうなずくと走り、正面玄関の扉に向かった。下駄箱を超えて、外の景色が見える扉に。鍵穴に鍵を入れようとする。しかし、合わない。落ち着け。焦っているんだ。昌樹は何度か試すが、鍵穴は合わない。この鍵は違う！ フェイクだっていうのかよ？ 昌樹は悪態をつくると鍵を放り投げた。

「期待させやがって！」扉を両の拳で叩く。

と、カチャリという音が聞こえた。それは、まるで鍵が回ったかのような音だった。昌樹は不思議に思いつつ、おそろおそろノブを回してみた。すると、扉が苦もなく開き、外の世界の匂いと、風を感じる事ができた。

出れる！ 何故鍵が開いたのか、さっぱりわからないが、外に行くことができる。

……しかし今でるわけにはいかない。ここから出れば助かるかもしれないが、仲間を置いていくわけにはいかないのだ。

どうして？ 自問自答する。義理なんてないじゃないか。このまま出ちまえ。どうせ妹は何しようともう死んだままなんだ。未解決でもいいじゃないか。

「くそっ」

外に背を向ける。

再び戻る。どうすれば助けられるのかはわからないが、彼は仲間のところまで走った。

「悠子」

怜香と智志が階段を下りようとすると悠子が上がってきた。怜香は声をかけた。「他のみんなは？」

悠子の顔は冷ややかだった。怜香は戸惑う。悠子の顔に浮かんでいるのは、笑顔でも恐怖でもなく、憎悪だった。

「だまされるな」智志が怜香の肩を掴み、自分の背後に回した。

「こいつは俺たちの仲間でもなんでもない。こいつはな、最初からいなかったんだ」

「智志、どういうこと？」

「俺たちはこいつにしてやられたんだ。黒幕はこいつだ。悠子なんていない。俺たちが校門を越えたときから、こいつの罠にはまっていたんだ。こいつはこの学校に長年巣くっていた化け物だ。蒼井柑那の黒魔術の儀式によってより力を得て、学校を支配するほどになった」

悠子が笑った。その笑い声は不気味に響いた。

「悠子？」怜香ははっとした。悠子に関連する記憶なんて全く思い出せない。いや、違う。悠子なんて元々、最初から仲間にはいなかった。

悠子に関する過去の記憶がない。悠子なんて、いなかったのだ。

その事実には怜香は打ちのめされ、ふらついて後ろに下がる。

「普通の人間じゃないな」悠子と名乗っていた者が声を発した。その声は低かった。「私の愉しみを邪魔するな」

「そつちこそ俺の仲間に出すな。消える。お前の愉しみは今日で終わりだ。冥界に帰るんだな」

悠子はまた笑った。女の声ではなかった。人間から発せられる声とはとても思えず、怜香は耳をふさぎそうになった。

「勝手に入ってきたお前たちにそんな権利があると思っているのか？」

「それはお互い様だろ」

智志は思い切り悠子を突き飛ばした。悠子は吹き飛び、倒れた。「怜香は階段を下りて一階に。お前の力でみんなを助けるんだ」怜香はうなずくと、階段を駆け下りていった。怜香は泣いていた。智志にはわかっていいるのだ。怜香では悠子と呼んでいた相手には手も足もでない。

智志……無事で、ね。

悠子は起き上がった。

「許さないよ」

智志は脇腹を押さえた。悲鳴を上げたくなくなるような痛みだ。それに、本調子だとしても相手が悪すぎる。相手は相当力を持った化物だ。自分の力ではまだ勝てない。ここが相手のホームだというのも問題だ。残念だが。

だが、全員を逃がすことはなんとかできるはず。してみせる。

こんなときだというのに、昔のことが思い出される。才能を持っていると賞賛された子供時代。それから始まる厳しい修行。大悪霊に敗れて死んだ肉親のこと、辛く、暗いだけの戦いの日々。

だが今は希望に満ち足りた日々しかなかった。仲間たちが常に智志を導いてくれ、輝かせてくれていた。

それを、壊させたりはしない。

智志は力を使った。

智志に迫り来る悠子が動かなくなる。

「なんと、異能者か！　だが青い青い」悠子の顔が憎悪によって変貌していった。人の顔ではなくなってきた。まるで犬のように口が裂け、真っ赤になった大きな目が爛々と燃えている。

「そのまま止まってる」智志は言ったが、長くもたないのはわかっていった。

こんなつもりではなかったのだが。智志は自分の失態に呆れていた。

この企画を計画したとき、きっと相手は霊ではないということとは

わかっていた。蒼井という少女の支配欲が、より支配欲と邪悪さを備えた者呼んだ。それが目の前にいる存在　おそらく、始めは低級な存在だった。霊ではない、邪悪な心を持った存在。それが年老けて段々と力を増していき、儀式によって手に負えない強さとなった。それはもう、邪神と言ってもいいクラスなのかもしれない。それでもなんとかなると思った。邪神だろうが、自分の力ならある程度はやれると思っていた。

甘かった。

力の差はありすぎた。

とはいえこのままやらはしない。

夏雄は生きていた。広との戦いで彼は自分も終わりだと覚悟していたが、広が急に攻撃の手を緩めだしたのだ。夏雄はチャンスだと思った。他の連中は逃げ切っている。広とこれ以上やるのはきつい。もう駄目かと思ったとき、広の動きが急に止まったのだ。チャンスだと思い、背を向けて逃げた。

「追え！」

敵の声が聞こえたが夏雄は構わず逃げた。追ってくる気配はなかった。たどrittいた場所は音楽室で、ピアノの影に隠れて体力回復を待った。といつても限度がある。広の躊躇のないバットの一撃を何度か食らっている。下手をすれば死んでいた。全身がふらふらだ。もし無事にここを生還できたら即病院生活になるだろう。

唯たちは無事だろうか。広と凶悪な糞教師霊を足止めしていたのだから、大丈夫だとは思うのだが。

ここにいっても埒があかない。夏雄はゴミ箱を探した。ここはまだ調べていない。ついでに調べておこう。ゴミ箱は奥の隅にあった。が、細かく調べてもどこにもヒントは隠されていないようだ。

ゴミ箱なんていっぱいある。全ての教室を回らないといけないなんて……厄介なゲームだ。

待てよ。夏雄は考える。ゴミ箱。

ゴミ箱？。

ゴミ箱というのはもしかして……。いや、だがそれはあまりにもくだらない。

しかし、だ。

夏雄は立ち上がり、ふらつく体で外に出ると廊下を苦痛に顔を歪ませながら走り、目的の場所にくるとその部屋の扉を開いた。

そこはパソコン部だった。さっき一台だけ起動したパソコンに向かう。パソコンはまだ起動していた。動力源は一体何だろうなと夏



雄は一瞬思う。マウスを動かして不吉なスクリーンセーバーを消し、デスクトップからゴミ箱をクリックする。クリックすると、一つだけゴミ箱にファイルがきている。そのファイルの表示名は、『h i r a k e g o m a』となっている。

ビンゴなのか？ 夏雄はためらわずファイルをダブルクリックした。

鍵の開くような音が金属音がパソコン内から聞こえた。そして、パソコンが急にシャットダウンし始めた。パソコンの電源が落とされる寸前、ディスプレイに血まみれの少女の顔が映し出された。焦点があつてない目が不気味だった。すぐに消え、画面は完全に真っ暗になる。

くだらない驚かせ方しやがって。夏雄は驚いた自分に腹が立った。息を整える。まあいい。これで鍵が開いたはずだ。後は唯たちを見つめるだけだ。

廊下に出る。唯、唯はどこにいるんだろう。もう外に出れるはずなのに。

唯のことがどうしてこんなに気になるのかはもちろん、彼女に惚れているからだ。彼女に惚れたのはそう前のことではない。

唯とは高校が一緒だった。彼女とはたまにからかったりすることもあったが、さほど深い仲ではなく、クラスの友人という認識だった。唯が同じ大学に通うことになったときも、腐れ縁のように思っていた。知った顔が一緒だというのは有り難いことではあった。

当時霊感があつた夏雄は心霊写真を撮って霊が実際にいるというのを世間に知らしめようと躍起になっていた。

霊を見たのは夏雄が高校生のときだった。広やクラスの友人と一緒に街に買い物に行った。デパートで彼はトイレに行き、小用を足しているときに背後で個室が開いた。誰か入っていたんだなと思つたが、開いた音がするだけだった。不思議に思つて振り返ると憎悪に歪んだ男の霊が立っていて、夏雄のほうをじっと見つめていた。

夏雄は彼が人間だとは思えなかった。最初に思ったのはゾンビだ。

顔がもう普通とは思えない。こんな顔をする人間なんて、いやしない。

ゾンビではなく霊だと思ったのは男がふっと消えたからだ。跡形もなく。

それ以来、夏雄は霊を頻繁に見るようになり、ストレスを抱えるようになった。霊に睨まれると体調が悪くなるし、精神が滅入る。暗示的効果なのかもしれないが、夏雄は度重なる霊との遭遇にうんざりし、次第に性格まで変わっていった。陰鬱になり、部屋にこもりがちになっていった。

夏雄の窮地を救ったのは広だった。広だけは夏雄の霊が見えるという言葉を信じた。彼自身、幼き頃に霊を見たことがあった。それ以来見たことはないが、霊はいると信じていた。彼はネットで見つけた霊に悩まされている方へというサイトを開き、サイトの主に連絡を取った。サイトの主は同じ県内に住んでいて、すぐに出会えた。広と夏雄は智志と出会い、そして夏雄は智志のおかげで霊に対する免疫がついた。

「精神を強くすることだ。君は靈感がある。霊障なんて君の強い靈感が弾いてくれるさ。霊を逆に困らせる方法を教えよう。多用はするなよ」

夏雄は彼と出会い、そして意気投合した。霊をカメラに納めてネットに載せるというのはどうだろうということ、智志はいいアイデアだと賛成した。

そして、廃屋ツアーができあがった。智志と夏雄と広。初めのメンバーは三人だった。

「霊に会えるし、廃屋の楽しさも堪能できる。一石二鳥。それにこれは精神を強くし、霊力を得る修行にもなる」

「危険はないかな？」夏雄が尋ねる。

「たぶんね」

人数が三人ではどうも少ない。そこで、夏雄は唯を誘った。唯も小学生のときに霊を見たということを知っていた。誘ってみる価値

はある。

唯を誘うと芋づる式に二人の女子がやってきた。全員で六人。人数は充分だった。

廃屋ツアーは旅行をも兼ねていた。最初は県内だけだったが、隣の県や、もう少し離れた県などに行き、だんだんと彼らは互いにとつてなくてはならないかけがえのない親友となった。最初のうちはどこかリーダー的に振る舞おうとしていた智志（最年長ということもあるが）もざっくばらんになり、心地よい仲間達の輪ができた。そして夏雄は天真爛漫な唯に惚れた。

恋愛はタブーということはないが、このメンツはこのままやっていきたいと思っていた。だが無理だろう。満希が智志に対して抱いている感情は尊敬する先輩に大してのようなものだ。怜香は違う。完全に智志に恋心を抱いている。智志もそれに気づいているが、気づかないふりをしている。

夏雄の唯に対する気持ちは抑えがきかなくなった。彼女を本気で好きになったのは、隣の山深い場所にある廃屋になった元サナトリウム。夜な夜な現れる黒い影に恐れをなして次々と逃げ出していたという曰く付きの、本格的な心霊スポット。侵入した時間は夜の八時。辺りは暗かった。

中に入るとあまりの雰囲気一同は圧倒された。智志ですら緊張した面持ちだ。

「影が現れたらすぐに俺に知らせて。泣き叫んでも構わないから」

「その影って何だと思うんだ？」夏雄が聞いてみる。

「霊……じゃあないかもな」

智志はそう言った。智志は正体を知っているのかもしれない。だが夏雄は怖かったので、それ以上追求しなかった。

唯に抱きつかれて夏雄は悪い気はしていなかった。

「あんまりひつつくとシャツが破けちまうよ」

「別にいいよ」

「俺がよくない」

満希と怜香も広のすぐ背後にいる。

「何かあったら広を押し逃げるからね」満希が言う。

「お前らのほうが霊感強いんだろうに」広が言う。

何かが動いた気がした。左手に見える、ドアのない部屋の奥で。

全てが暗いのだ。きつときのせいだ。だが、気になった。カメラを

構え、夏雄は中に入った。唯は何かを察したのか、夏雄に抱きつくのをやめた。

「すぐ終わるよ。智志についてけよ」

部屋をライトで照らす。何室なのだろうか。ほとんどのものが取っ払われていて、残った棚などにファイルが残っているだけのだ。

椅子の組み合わせから見ると、診療室だろうか。医療機器はさすがに撤去されているようだ。

この辺りに何かが動いたような気がしたが、きのせいのようだ。夏雄は戻ろうとした。

入り口にドアがついていた。ドアはついていなかったはず。ドアは閉まっていた。嫌な予感がしたが、遅かった。

何かに全身をつかまれ、締め上げられた。無数の手だ。無数の手が夏雄を掴み、全身を締め付けている。叫ぼうとしたが、口をふさがれた。

首を絞められる。

まずい。

落としたライトに照らされた光の中に異質な影が見えた。夏雄は異質な存在、怪物を垣間見た気がしたが、気のせいだと思いたかった。無数の蛇めいた触手のようなものは、見間違いかもしれない。ドアが開かれた。

「夏雄！」

影が消え、手の感触はなくなった。夏雄はその場に膝をついた。

「夏雄、大丈夫？」

「唯……何も見なかったか？」

「え？ うっん、何も」

「そっか。智志呼ぼう。ここはちょっと危険すぎるぞ」

「わかった」

「でも助かった。唯がいてさ」

「一人だけ置いていくわけにもいかないでしょ」

「ドア、最初はなかったんだ」

「ドア？ そのの？ 最初からあったじゃん。開いてたけど、閉まった。夏雄が閉めたと思ったんだけど、なんか変だと思ったよ」

…… ドアはあったらしい。

夏雄は思わず笑った。駄目だ。敵のほうが一枚上手らしい。

「大丈夫か？」

唯の声を聞きつけて智志がやってきた。

「夏雄がやられちゃったみたい。いったん戻ろうよ」

「それは残念。これからだというのに」

「まあ今日は途中のトンネルでも見たし、ここは雰囲気だけでお腹いっぱいかな」

唯は夏雄に肩を貸した。

「ごめんな、唯」

「いつも助けてくれるのは夏雄だしね。ちょっとは役に立ってよかったよ」

「あーあ、だらしねえなあ夏雄。女に肩貸してもらって」広が口笛を吹いた。

唯は恐がりのくせに好奇心旺盛で、そしていつも仲間のことに気を配っている。誰かが危険だと察したらすぐに助けに向かう。今日だって、取り乱していたがすぐに勇気を持つ。彼女はそんな女だ。

今回は幽霊に免疫のついた自分たちが完全に弄ばれている。実に悔しい。絶対に全員無事に生還する。そうすれば、ここの主の鼻をあかすことになる。

他の連中はどこにいるのか。鍵も開いたし、正面玄関のあるもう

一つの棟へいこう。夏雄は移動を開始した。

智志の指示通り一階に向かった怜香は目の前の状況に困惑した。ぼろぼろのワンピース姿の女を数人で取り囲んでいる。状況が飲み込めない。自分の知らない人間も幾人かいるようだったが、見た限り協力的なようだ。だが、とにかく今はそのワンピースの亡霊を取り除く必要があるのはわかる。先ほどは逃げ出したが、今はこんなに仲間がいる。恐怖は全くない。

消える。心の中で念じる。力が跳ね返り、怜香は軽い痛みを感じた。駄目だ。相手は並の霊じゃないようだ。怨根が強すぎる。怜香は再び試した。強い念を送る。

消える。消滅してしまえ。

今度は跳ね返らず、相手は苦しがつているそぶりを見せた。

智志は怜香が強い力を持っていることを見抜いていた。智志自身が霊媒師だということには驚いた。見たところはやんちゃなその辺の若造な雰囲気があるからだ。だけど確かに、よくよく相手を見ると、普通とは違う空気を感じることができると。落ち着いて、澄んだ空気。智志は、普通とは違う。誰よりも人間を大事にしている。だからだろうか、智志が霊媒師をしているのは。彼は強い思いを抱えてそれに縛られている霊を救ってやりたいと思って仕事をしている。そして今まで多くの亡霊を無に返してきた。

怜香は智志に手ほどきされ、霊障から身を守る術を身につけた。そして霊を跳ね返すほどの力を身につけた。霊が実体化するのはほとんどありえないと智志はいう。その力の大部分は、自分自身の恐怖心であるという。恐怖心が霊に力を与え、実体化を許してしまうようだ。それでも、人間を殺すような行為にいたるまでに霧散するほどの僅かな間のような。霊自身はほとんど知性がないようで、生前の思いによって突き動かされている。霊なんて所詮、相手に恐怖心を受け付けるだけの存在でしかない。

智志の言葉は含蓄があるが、恐怖感を与えるだけで十分すぎるほどの脅威だと怜香は思った。

重要なのは恐怖心を無くすこと。それが一番難しい。一般的な霊に対して無敵なほどの力を得た彼女だが、それでも霊は怖く、克服することはできないでいた。

目の前にいるワンピースの亡霊は完全に実体化している。それは、やはりこの学校に救う悪霊のせいなのだろう。とてつもない力を持つ存在がいると智志が話してくれたことがある。そういう存在は霊ではなく、神のような力を持っているらしい。

この霊もその邪神によって力を得ているのだろうが、怜香は怯まずに念じた。相手は悪霊かもしれない。しかしこちらは、強力な除霊の力を持っている。智志が天才と認めた力。亡霊に負けるわけにはいかない。

亡霊は苦悶の声を上げた。その周囲にいる者たちも苦しむような嫌な声だった。

ワンピースの霊は怜香の念によって悲鳴を上げて霧散した。

「やった！」美菜が笑みを浮かべたが、一瞬だけだった。まだ、敵はいる。

「ヒロ！」怜香が叫ぶ。



夏雄が棟を移り、一階へ向かおうとすると、彫刻刀を持った男子生徒の霊が五匹、出現した。

これはきついな。

だが夏雄は自分の能力をきちんと思い出した。取り乱すとすぐに忘れてしまうのだ。自分の、素晴らしい霊能力を。

しかし、それにしても、能力を駆使してもここを抜け出るのは難しそうだった。

「あんた！」

春人の声があった。春人は霊の一体に飛びかかり、殴り倒した。

「さあ行こうぜ。あんたらのお仲間はまだ一階にいる。ここから出れるんだよ」

夏雄は襲いかかる霊に触れる。すると、その霊は動かなくなった。全てを停止させる。しかしすぐに逃げないと。これは対して持たないから。

「みんな玄関付近にいるのか？」

走りながら夏雄は尋ねる。

「そうだよ。みんな集まってる」

「じゃあ、全員帰れるな」

春人は一瞬、答えるのを躊躇ったように夏雄には思えた。

「ああ……あんたらは帰れるさ」

「何いってんだ。お前らもだろ。サーフィン、やるんだろ」

春人は答えなかった。

唯の目の前に群がるのは血塗れの女生徒だ。向こうも必死なのだ。唯は思う。これだけの数はさすがにきつい。

しかし唯はにやりとした。内心恐怖で一杯だったが、この学校に

巢くう支配者に対する精一杯の強がりのつもりだった。

大丈夫。あたしだって一応、智志の弟子なんだ。秘策はあるもの。唯が能力を発動させると、周りの霊が全て消え去った。

唯はその場に膝をついたが、勝也が支えてくれた。

そのとき、唯はあることに気付いた。しかしそれを伝える必要はなさそうだった。相手の目が、それを理解していることを物語っていたから。

「何したんだ？　すごいなあんた」

「一時的に霊的磁場を狂わせて場にいられなくしただけ。すぐにまた出てくるよ……怜香みたいなのはあたしにはできないんだから」  
疲れた。このまま眠ってしまいそう。だからこれをやるのは、絶対によばいときだけなんだ。

怜香がきたのかと広は思った。嫌な記憶が蘇る。怜香の冷たい手にそつと触れられ、自分を失ってしまったこと。全てが思い出された。夏雄……。

相手が怯むほどの大声を上げてバットを振るい、教師を床にたたき付けた。何度も何度もバットを振るう。

だがすぐに復活し、ナイフを構えて向かってくる。

くそつ、割にあわねえな。広は苦々しく思う。夏雄がいればな。

あいつは霊の動きを数秒間止めることができるという変な力を持っていた。逆金縛りだと本人は言っていた。

夏雄はもういない。自分が殺してしまった。

広の動きが鈍った。

相手のナイフが胸を突こうとする。

そのとき、ナイフが急に止まった。

広は呆然としていた。致命傷を覚悟したのだが、教師の体は完全に硬直している。

「長くは持たないけどよ」

教師の肩に手を触れているのは夏雄だった。夏雄は自分が扱える力を今、役に立てて見せた。霊を一時的に拘束する力を。だが夏雄自身が言ったように、長くはもたない。全身が極端に疲労する技だった。

「夏雄……無事だった」

「無事なわけねえだろ。あとで何発かお見舞いするから覚えとけ」

夏雄はそう言ったが、広は嬉しそうだった。自分が生きていて嬉しくて仕方ないようだ。夏雄はそんな広を見て、先ほどの行いは許してやつてもいいかなと思った。

「みんな無事ってわけかい」春人が言う。

「おい！ 早く玄関まで逃げ！」

その声は智志の声で、全員が一斉に声のした方を見た。

智志！ 夏雄は心の中で叫んだ。しかし智志との再会を喜ぶ暇はなかった。智志の背後からは醜い巨大な 廊下全体を埋め尽くすような巨大な顔が迫ってきていたからだ。赤い大きな目、大きな口内に犬歯が無数に生えている。

「逃がさないよお」巨顔が耳をつんざくほどのすさまじい声を出した。

全員悲鳴をあげて一斉に逃げ、玄関まで向かい、玄関扉を超えた。夏雄は最前列にいたが、唯がないことに気づいた。振り返ると唯は腰を抜かしたのか床に膝をついていた。

「あの馬鹿」夏雄は唯のところに戻る。全速力だ。巨大な顔が今にも唯を飲み込もうとしている。

唯の腕を無理矢理掴んで起き上がらせ、抱えて走る。唯は軽い部類だが、人一人抱えてこの巨大な化け物から逃れるだろうか。夏雄は出せる限りの速度で玄関まで急いだ。

「夏雄無茶だよ！」

「お前を守るつていつたる！」

なんだか生暖かい。唯の下半身が湿ってる。

こいつ、漏らしたようだ。

巨大な顔が今にも口を開けて二人を飲み込もうとしていた。

角を曲がり、玄関へ。智志が扉を開いて待っている。三人とも急いで玄関の外に出た。雨音が激しく聞こえた。

智志達のメンツは全員外にでた。しかし、春人、勝也、美菜の三人だけが扉の前で残っている。三人とも、どこか納得したような、諦観したような顔つきをしている。

「何してんだよ！ 出るよ！」広が叫ぶ。

「春人？」美紅が呟く。「勝也、美菜。出てきなよ！」

「思い出したんだ」

春人が言った。うつすらとした目からはよく表情が読めない。諦めのような、寂しげな顔つきにも見えるし、どこか清々しい様子にも見える。

「俺たち、もう死んでるんだな。だから、そこから先には行けない」  
勝也の目、口から血が流れる。彼らは死人のように肌が青くなつていく。

「さよなら、美紅をお願いね」美菜の全身が血に染まり、頭部からも血が流れ出した。

美紅は悲鳴を上げると気絶した。

手が、巨大な手が次々と彼らの胴や頭を掴み、春人らは校舎の奥へと戻された。

扉の前には悠子が立っている。その顔は微笑んでいた。

「ゲームとしては楽しかったよ。全員逃がす気はなかったんだけどさあ。優秀な奴もいたみたいだし。最初にちゃんと殺しておくべきだった」

そう言ったあと、悠子は般若のように醜い顔になると瞬時に消えた。それから扉が勢いよく閉まり、それから笑い声が響いた。女の楽しげな笑い声が、辺りにこだまし、そして辺りは静寂に包まれた。智志が校舎に背を向ける。

「行こう。ここも校舎ほどの支配力はなくとも奴のテリトリーだ。校門から出ないと」

夏雄はいつまでも唯を抱いていることに気づいて慌てて彼女を降ろした。

「歩けるか？」

「うん、夏雄、ごめんね」

「気にすんなよ」

「ずぶ濡れだ。だけど、どうでもいいや」満希が言った。雨音は激しく、全身を濡らしていたが、彼女は笑っていた。

「夏雄、言わないでね？」唯が小声で夏雄に言う。

「俺も少しちびりそうになったし。雨でごまかせ」夏雄は笑って唯

の失態を吹き飛ばそうと努力した。急に唯が倒れそうになったので、夏雄は肩を抱いて歩いた。

校門を出ようとすると、昌樹が立ち止まった。

「どうした？」夏雄が声をかける。

「いや、先行っててくれ」

昌樹の前には亡霊の姿が見えた。実体を伴った亡霊。だが亡霊だとすぐにわかる。それは妹だったからだ。妹の姿だと、兄の昌樹にはすぐにわかったのだ。

「お兄ちゃん」

「美幸なのか……？」

亡霊は手を差し伸べてきた。死ぬ前と変わらない、小さな手だった。昌樹はためらわなかった。畏でもいい。妹の霊に殺されるのならしい。手は、温もりが感じられた。

頭の中に映像が浮かびあがる。鮮明な映像だった。

蒼井と、妹の姿が見えた。二人とも何か口論しているようだ。

「あんた、変な力使えるからおかしいよ！ 自分が偉いと思っ  
思っているみたい。そんなことしてたら絶対後で後悔するから！」

「そんな口を今のあたしに聞くなんて、いい度胸じゃん美幸ちゃん？ 前々からあたしのことを気に入らないのはわかってたけど、ちよつと目障りになってきたね」

美幸は蒼井の脅しに怯んで数歩後退した。だが遅かった。暗闇を纏っている彼女はすでに催眠術以上の力を手にしていた。

美幸は苦しそうな顔をしだした。首に手をやるが、しばらくすると口から泡を吹き、手をだらりとさせ、床に倒れた。

蒼井はにやりとした笑みを浮かべ、それから大きく息を吸った。

「誰かぁ！ 河西さんが倒れた！ 早くう！」

美幸はこうやって死んだのか。目の前の妹は微笑みを浮かべてい

るが、少し寂しそうな顔になると、チエシヤ猫のようにゆっくりと消えていった。

「来いよ、もういいだろ」

智志が呼んでいる。我らのリーダーが。

「ああ」涙を拭いて、昌樹は校庭の柵を越えた。

## エピソード

智志も夏雄も広も入院し、今日も女達が見舞いにきていた。全員同じ病室で、外は明るく、賑やかな雰囲気だった。唯は夏雄に甲斐甲斐しく桃を切っている。二人は互いの顔を見て微笑み合っている。二人の進展具合を他の連中は気づいているが、黙認してあげていた。「それで、あの美紅って女はどうなったの？」満希は智志に尋ねた。「美紅さんか。俺も一応説明したけど、理解してくれたのかな。何だか思い詰めた顔をしてた」

「そりゃあそうだろうな。自分が他の三人を殺したなんて信じたくないよな」広が言う。

「そんなことは言わなかったよ。俺は三人はもう死んだということを伝えただけさ。彼女がやったといっても自分の意志じゃないし、あの三人は別に彼女のことを恨んだりしなかった。あの三人の仇を取ってやりたいけど、今は触らぬ神になんとやらだ。情けないけど」

「あの学校は当分、呪われたままだな」広が言う。

「仕方ない。邪神という存在を相手にするには俺は力不足だよ。記憶の改竄ができるほどの相手だもの。全ての原因はあいつなのに」智志は悔しそうな顔をした。「あの化け物はかなり昔からあの学校に棲み着いて、悪さをしてきた。儀式のおかげで強大な力を得てしまった。蒼井という生徒はやってはいけないことをしてしまったよ。いつだって原因は人間の愚かさなんだな。俺も愚かだった。怜香に刺されてそれがよくわかったよ」

怜香は顔をうつむかせる。智志は怜香の肩を優しく触った。怜香は当惑したような、嬉しそうな顔をしてみせる。

「入ったとき、何かの気配を感じていたが、平気だろうと思った。今回は全部俺の判断の甘さが原因だ。みんなにはすまないと思っっている。俺が油断しないで最初から警戒していれば怜香や広があんなことにならないで済んだかもしれない」



「まあ、あんまり気にすんなよ。俺だって夏雄をばこぼこにしたけど、俺も夏雄にかなりやられたし」

「俺のほうがずっと酷いぞ、怪我」夏雄が言った。

「そういえば昌樹は？」満希が言う。

ドアが開いて昌樹が顔を出した。手には何かの紙と見舞いのメロンを持っていて。

「やあ。ネットで検索した心霊スポットなんだけど、どうかな？

少し北だけど」

紙はネットの記載をコピーしたものだ。廃屋になった幼稚園。時々聞こえるはずのない児童の叫び声……。

「どうかな？」

「面白そう」唯が言った。

「昌樹お前、ずいぶんと廃屋巡りが気に入ったようだな」広が笑う。

昌樹はにやりとした。「怪我が治ったら考えてくれよ」

「次の廃屋ツアーはもう少し控えめだといいいけど」智志が言った。

「夏雄、何見てるの？」

何かの資料を読んでいる夏雄に唯が問いかける。

「ああ、免許取るうと思つて。スキューバの」

金須高等学校の正面玄関前に再び新たな訪問者が顔を揃えていた。

「本当にここに春人たちがいるのかよ？」

春人の海仲間が疑いの眼差しを女に向ける。

「いるよ。絶対に。早くだしてやらないと。だけど気をつけて。なんだかこの中変だから。あたしも記憶が曖昧で、よくわからないけど……」美紅が言った。

「あいつもなんでこんなところに……こんなところで何しているんだ？ もう何日経つてると思つてるんだ」勝也の兄がため息をついた。

「美菜は変な場所、好きだしなあ」美菜の友人はあきれ顔をしてい

るが、内心は心配でならないのだ。

「あいつらはこんな陰気な場所が大好きなんだよ。さ、はいろ。みんな連れ出してやらないとね」悠子が言った。み

## エピローグ（後書き）

読んでくれた人に感謝します

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0505x/>

---

闇の校舎

2011年10月3日03時21分発行